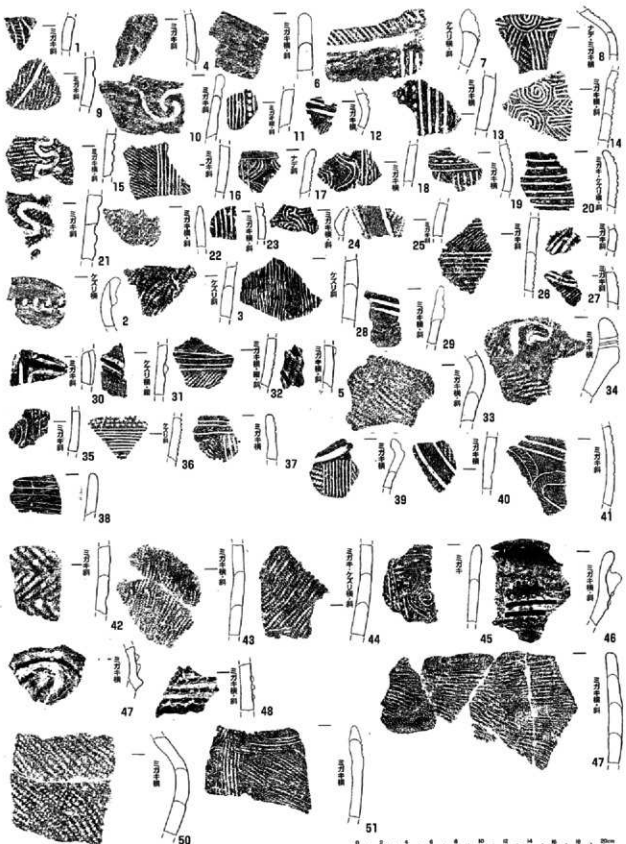
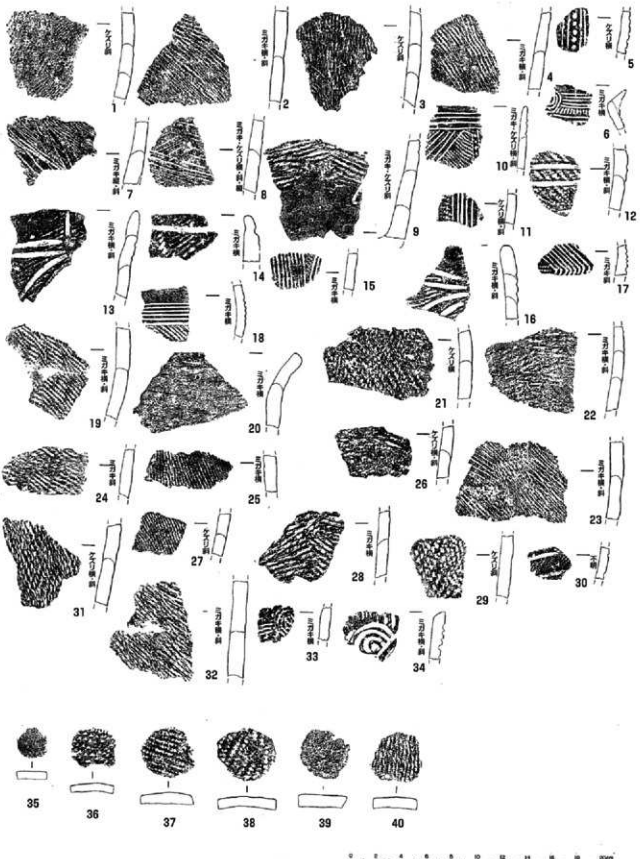
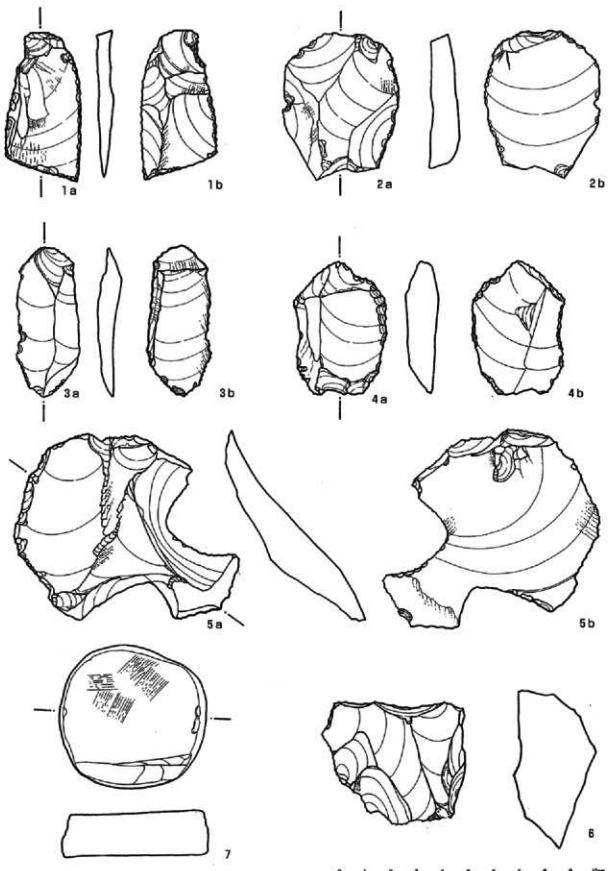


第51図　大樽遺跡第5次調査出土土器拓影図（2）



第52図　大樽遺跡第5次調査出土土器拓影図（3）



第53図　大樽遺跡第5次調査出土石器・石製品実測図

第Ⅳ節　大樽遺跡 第６次調査

１．検出遺構

今回野調査で検出された遺構は63基である。これらの遺構は、縄文時代及び中世に属するものである。ＨＹ（住居跡）３基、ＤＹ（土壙）22基、ＰＹ（ピット）34基、ＤＮ（井戸）２基、ＮＮ（配石遺構）１基ある。ここでは、縄文時代を中心に概述する。

１）竪穴住居跡（ＨＹ17・35・36）「第54・55図」

ＨＹ17は調査区の中央部で確認された。平面形はほぼ円形を有しており、長短径3.5～3.6ｍ、深さ41㎝を測る。埋土は３層に分けられたが、上部は削平されたものと判断される。ＰＹ65～70のピット群は壁柱穴と推測される。出土遺物には第58図16－18・25の土器片がある。

ＨＹ35はＨＹ17の西側、中央部西側の壁面で確認されが、西側が調査区外であることから、平面形は不明であるが隅丸方形を呈されたものと判断される。確認長径（4.7ｍ）、深さ16㎝を測る。埋土は４層に分けられ、底面はほぼ平坦であるが西側が若干低い。壁柱穴は確認していない。ＤＮ36井戸跡に切られＤＹ61土壙と重複している。

ＨＹ36はＨＹ17の南側、南壁側で確認された。南側の一部をＤＹ22に切られているが、平面形は楕円形を呈するものと推測される。確認長径（4.4ｍ）、深さ19㎝を測る。底面はほぼ平坦であるが西側になるほど若干低くなる。埋土は１層のみである。上部は削平されたものと判断される。ＰＹ32～34・41～43・55の７基のピット群は住居跡に伴うものとと推測される。

２）土壙（ＤＹ４・６・９・26）「第55・56図」

ＤＹ４は調査区の北側で確認された。ＮＮ５に重複し切られており、平面形はほぼ円形を有するものと推測される。確認長径（2.3ｍ）、深さ56㎝を測る。埋土は４層に分けられ、底部は平坦である。

ＤＹ６はＤＹ５の西側で確認された。ＮＮ５に重複し切られており、平面形は不整楕円形を呈する。確認長径（6.5ｍ）、深さ71㎝を測る。埋土は４層に分けられ、西側で落ち込みが確認された。

ＤＹ９は調査区の中央部の西側で確認された。西側は調査区外であるが、平面形はほぼ円形を呈するものと推測される。確認長径（2.5ｍ）、深さ42㎝を測る。埋土は６層に分けられた。

３）井戸跡（ＤＮ36・53）「第54・55・57図」

ＤＮ36はＨＹ35内の南側で確認された。上部から下部まで河原石を積み込んだ石積の井戸である。平面形は円形を呈し、掘り方は長径約1.5ｍ、深さ2.5ｍを測る。半裁はしていないことから埋土の状況は不明である。遺物は出土していないが、中世期に属するものと判断される。

ＤＮ53はＨＹ35とＨＹ36内の間で確認された。ＤＮ36と形態が同様である。平面形は南北方向に長軸をもつがほぼ円形を呈する。掘り方は長径約1.6ｍ、深さ2.0ｍを測る。半裁はしていないことから埋土の状況は不明である。遺物は出土していないがＤＮ36と同様中世期に属するものと判断される。

４）集石遺構（ＮＮ５・16・26）「第54・56・57図」

ＮＮ５はＤＹ４の西側で確認された集石遺構である。ＤＹ４に切られＤＹ６を切る。平面形は不整楕円形を呈する。掘り方は確認長径（約４ｍ）、深さ31㎝を測る。埋土は４層に分けられる。底面

には20～50㎝大の河原石を含む礫群が多量確認された。

5）溝跡（ＫＹ３）「第54・57図」

ＫＹ３は調査区の北東側で確認された。溝跡と判断するか土壙と判断するかであるが、平面径はやや長めの楕円形を呈し、長径4.9m、深さ48㎝を測る。埋土は５層に分けられる。

2．出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、その大半が縄文土器であり、他に円盤状土製品・石器・石製品・礫等がある。遺物の総数は1735点、整理箱に約７箱出土している。遺構内から出土した遺物を中心に概述する。

1）出土土器

・Ｂ群土器「第60図17～19」

貝殻腹縁圧痕文と貝殻沈線文を組合わせて構成するもので、常世式に平行するものである。

・Ｃ群土器「第59図22・23」

貝殻腹縁沈線文を横位に施文するもので、内湾する器形は明神裏Ⅲ式の特徴である。

・Ｅ群土器「第59図20～23，第60図12・13・20～23」

撚糸圧痕文に交互の斜行沈線を交互に加えたものや蕨状撚糸圧痕文を配するもの。帯状にキザミを加えて口縁部文様帯を置き胴部を羽状縄文で構成している。花積下層式に併行する。

・Ｇ群土器「第59図26」

斜縄文に結節部分を横に転回するもので前期末の土器と推測される。

・Ｎ群土器「第58図2，第59図1～4・25」

太状の沈線文と稜線文で文様を構成するもので、変形「Ｊ」字状文や「の」字状文が存在することから綱取式に併行するものと考えられる。

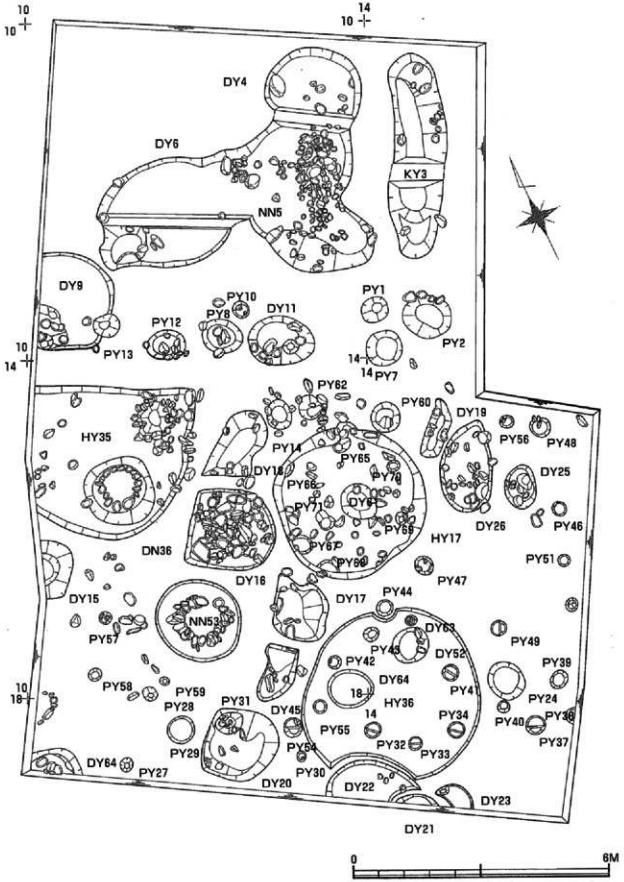
・Ｏ群土器「第58図1・3，第59図5～12・14・15・19・20・27・28，第60図2～4～6・14・15・25・26・28・30」　堀之内１式と三十稲葉式に併行する土器群を一括した。前者は沈線文によるステッキ状文や同心円文、バスケット状文を口縁部から胴部に配するのを特徴としているが、後者は円孔状の及び半円状の突刺文を多様して構成している。

・Ｐ群土器「第59図13，第7・9～11・16・27・29・31図」

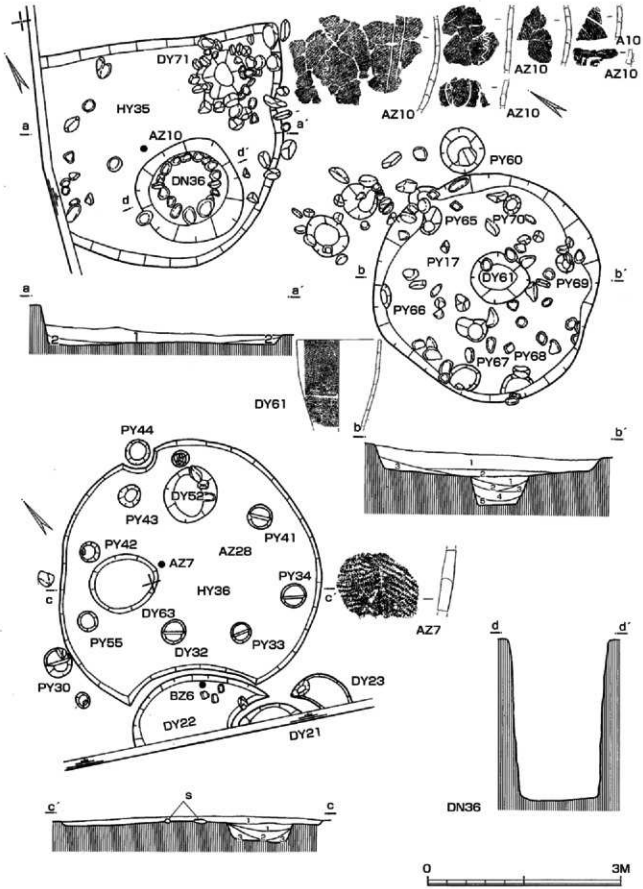
入組文や平行沈線文等を単位文様として横位に展開するもので、宝ケ峰式に平行する。

・Ｑ群土器「第59図24，第60図8」

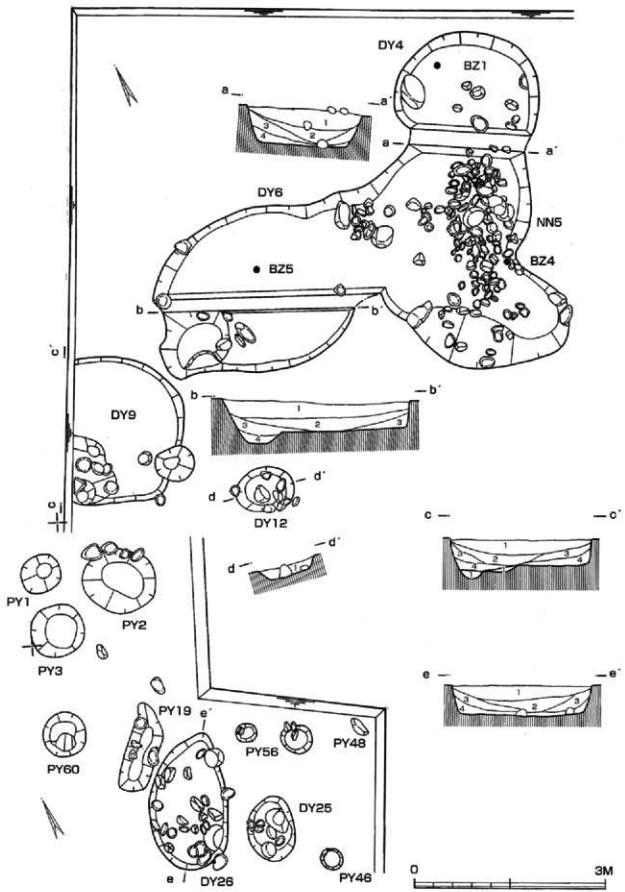
２点出土している。クランク状の入組文にキザミ加えた単位文様を主体として横位に展開するもので、十腰内式に平行するものとみられる。



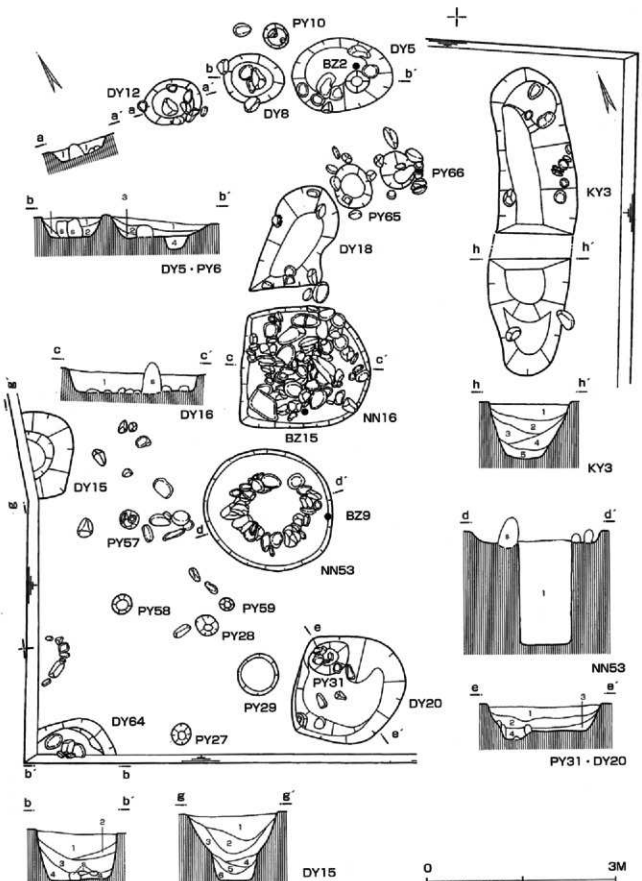
第54図　大樽遺跡第6次調査遺構全体図



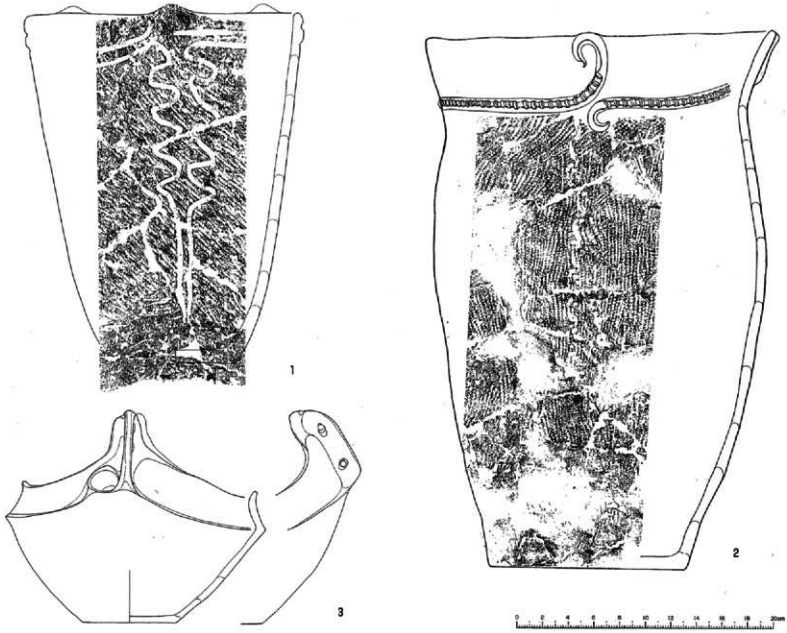
第55図　大梅遺跡第6次調査竪穴式住居跡平面図



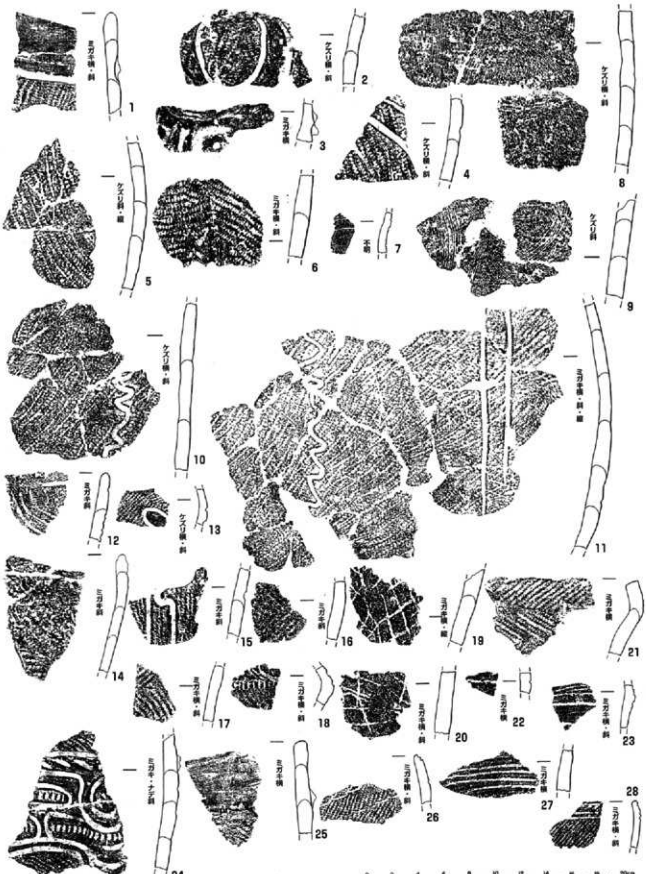
第56図　大樽遺跡第6次調査土壙平面図（1）



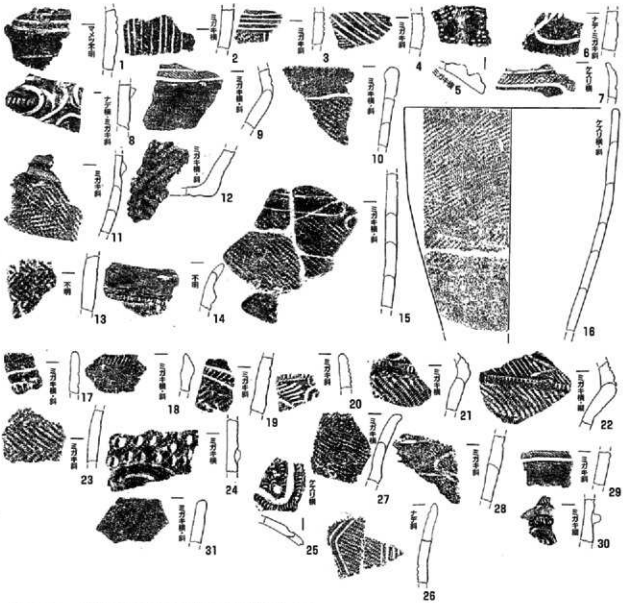
第57図　大樽遺跡第6次調査土壙平面図（2）



第58図　大樽遺跡第6次調査出土土器実測図



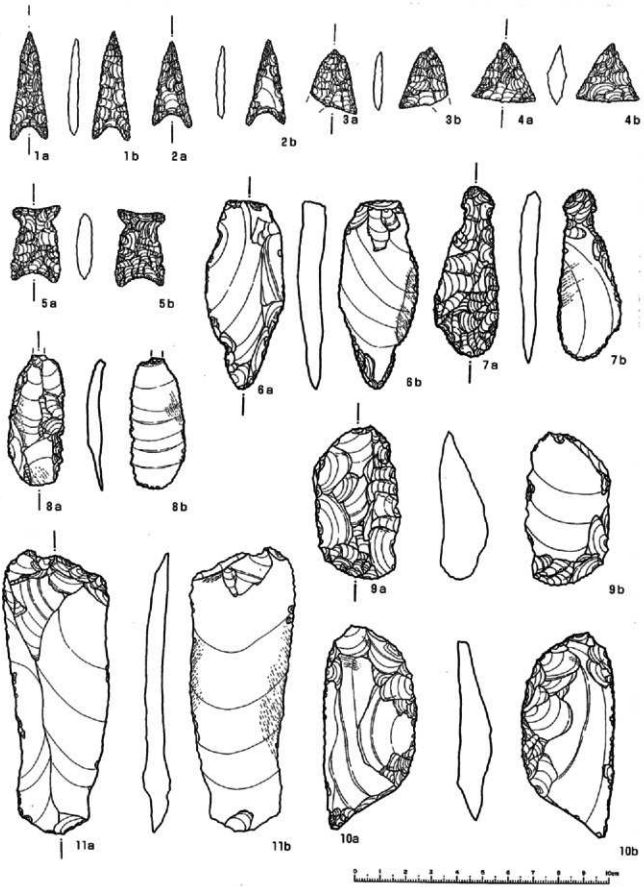
第59図　大樽遺跡第6次調査出土土器拓影図（1）



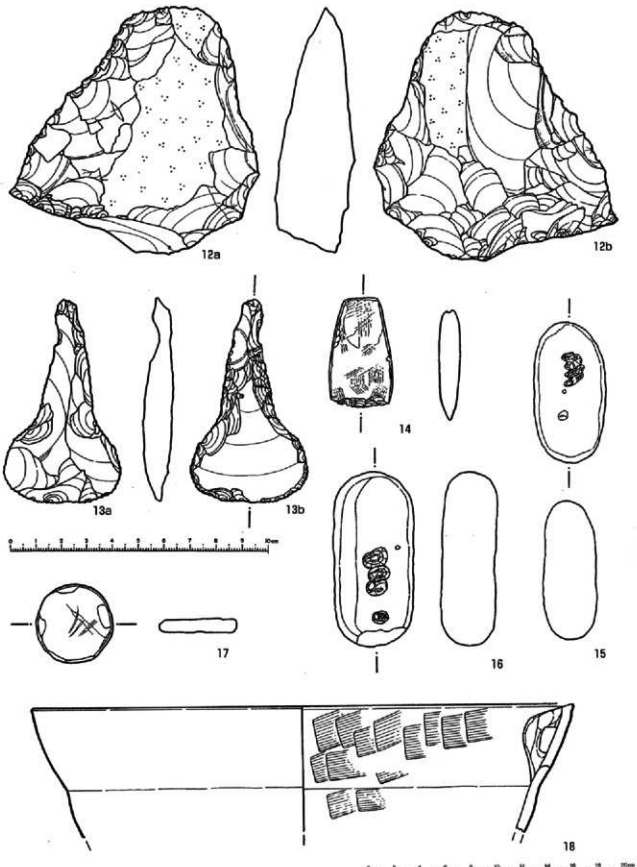
第60図　大樽遺跡第6次調査出土土器拓影図（2）

2）出土石器「第61図1～10・第62図1～7」

石器、石製品は総数314点出土している。完成石器は1～4の石鏃、5は異形石製品、7の石篦状石製品、14の磨製石斧、17が円盤状石製品、18が当市大浦遺跡群から出土例が多い、中世期に属する3単位の取っ手が付属する内耳取手土鍋である。他に凹石等がある。　石篦状石製品、14の磨製石斧、17が円盤状石製品、18が当市大浦遺跡群から出土例が多い、中世期に属する3単位の取っ手が付属する内耳取手鍋である。他に凹石等がある。



第61図　大樽遺跡第6次調査出土石器実測図



第62図　大樽遺跡第6次調査出土石器・土器実測図

第Ⅴ節　大樽遺跡 第７次調査

１．検出遺構

今回の調査で検出された遺構は、調査面積が66.3㎡と小範囲であったことから27基のみの確認である。検出された遺構にはＤＹ（土壙）14基、ＰＹ（ピット）11基、ＫＹ（溝跡）１条ある。これらの遺構は縄文中期及び中世に属するものである。ここでは遺構の概略を述べる。

１）土　　壙

ＤＹ１「第63・64図」

調査区の北側中央壁面で確認された。重複関係認められない。平面形は不正楕円形を有するものと推測される。確認長径（80㎝）、深さ39㎝を測る。埋土は３層に分けられ底部には河原石が数個確認された。、底部は西側が垂直に近く、東側が緩やかに堀込んでいる。出土遺物はないが、縄文後期に属するものと判断される。

ＤＹ２「第63・64図」

調査区の南側中央壁面で確認された。ＤＹ11・ＰＹ23と重複し双方を切っている、平面形は不正楕円形を有するものと推測される。確認長径（1.4ｍ）、深さ26㎝を測る。埋土は４層に分けられ、底部はほぼ平坦である。出土遺物はないが、縄文後期に属するものと判断される。

ＤＹ３「第63・64図」

調査区の北東側で確認された。重複関係認められない。平面形はほぼ楕円形を有し、確認長径80㎝、深さ39㎝を測る。埋土は１層であり、南西側が若干窪んでいる。出土遺物はないが、縄文後期に属するものと判断される。

２．出土土器

・Ａ群土器「第65図45・46」

細線による斜行文と半戟竹管文による平行沈線文の土器片で、田戸下層式とみられる。

・Ｂ群土器「第65図1」

貝殻腹縁圧痕文を上下に配した土器片で、大寺式及び常世式に平行する。

・Ｅ群土器「第65図2・3」

太状の原体を用いた羽状縄文の胴部片であり、前期初頭に位置付けられる。

・Ｊ群土器「第65図4～13」

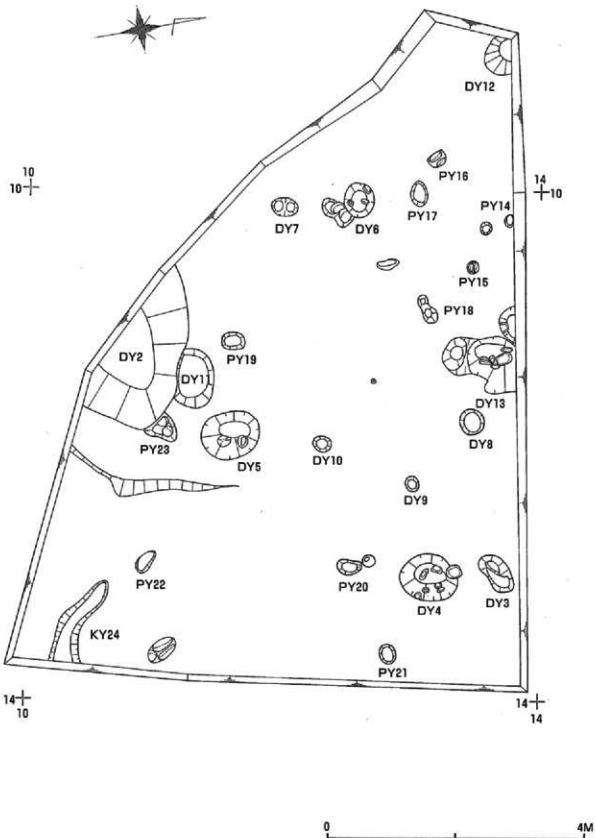
調整沈線と隆線を組み合わせて懸垂文や渦巻文を構成するもので、大木８ｂ式に求められる。

・Ｋ群土器「第65図14～20」

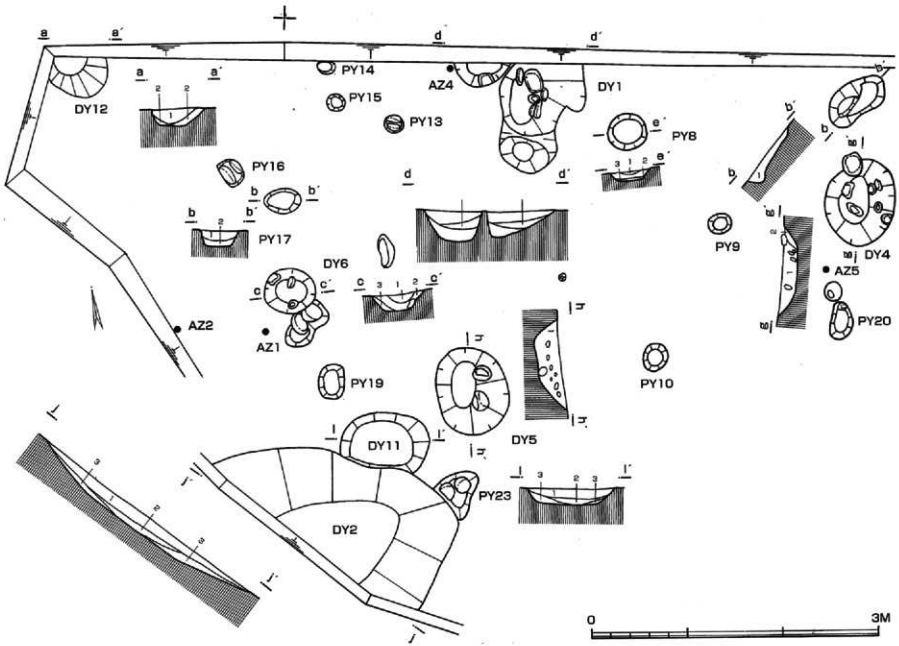
縦位の「Ｕ」字状文もしくは楕円文を単位文様として展開するものであり、大木９ｂ式に併行するものと考えられる。

・Ｌ群土器「第65図21・22」

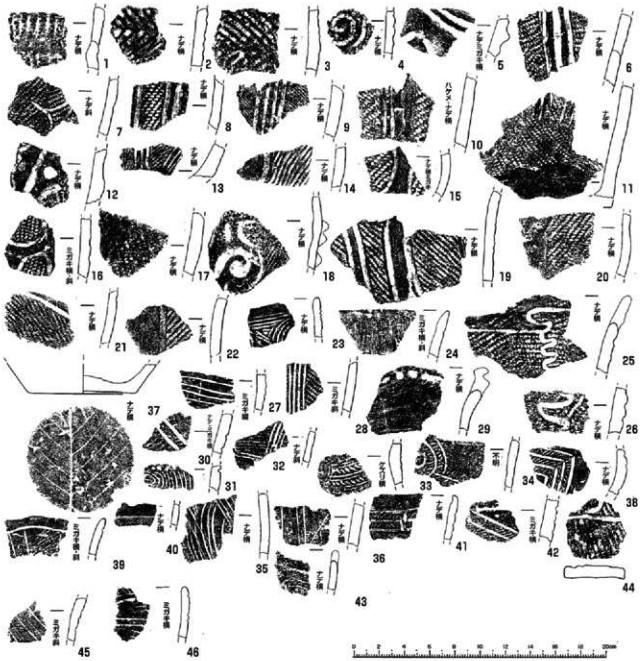
断片であるが、磨消縄文の手法を施したものであり、「Ｃ」字か「Ｓ」字状文等の単位文様を配するものと考えられる。大木10ａ式に併行するものと推測される。



第63図　大樽遺跡第7次調査遺構全体図



第64図　大樽遺跡第7次調査土壙平面図



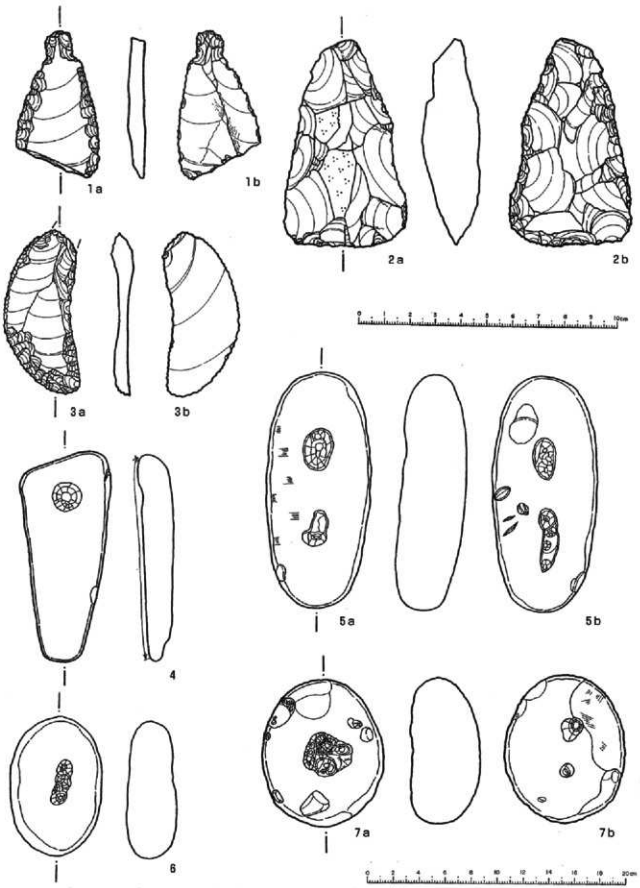
第65図　大樽遺跡第7・8次調査出土土器拓影図　　**45・46（第8次調査）**

・O群土器「第65図23～38」

多条の細線を用いて縦及び同心円文やバスケット状に構成するものと太状の沈線文でステッキ状文を構成するものに分けられる。堀之内1式に併行する。

・P群土器「第65図39～43」

沈線文による平行から円形、方角文等を配し、内部に縄文を埋めるもので、加曽利B式及び宝ケ峰式に平行するものと考えられる。



第66図　大樽遺跡第7次調査出土石器実測図

第Ⅵ節　大樽遺跡 第８次調査

１．検出遺構

今回の調査区は２箇所あり、便宜上西側をＡ区、東側をＢ区と呼称した。第８次調査で検出された遺構は27基である。これらの遺構は、縄文中期・後期及び中世に属するものである。今回検出された遺構にはＤＹ（土壙）５基、ＰＹ（ピット）18基、ＫＹ（溝跡）２条、ＤＮ（井戸）２基ある。Ｂ区は撹乱が著しく土壙１基、ピット１基のみである。

１）土　壙

ＤＹ１「第67・68図」

Ａ調査区の北東側で確認された。重複関係は、中世期の浅い土壙ＤＹ21に切られている。平面形は楕円形を有するものと推測される。確認長径（2.2m）、深さ79㎝を測る。埋土は２層に分けられる。底部は西側が垂直に近く、東側が緩やかに掘込んでいる。後期の遺物が出土していることから、縄文後期に属するものと判断される。

ＤＹ20「第67・68図」

Ａ調査区の西側中央部のピット群が密集する付近で確認された。重複関係はない。平面形は不正形を有する。確認長径（1.１m）、深さ16㎝を測る。埋土は１層ものであり、底部はほぼ平坦である。出土遺物はないが、縄文後期に属するものと判断される。

２．出土土器

・Ｂ群土器「第69図17・18・39」

半載竹管文を用いた波状沈線文を境として貝殻腹縁圧痕文を施したもので、常世式に平行するものとみたい。

・Ｃ群土器「第69図12～16・40・47～49」

太状の貝殻沈線を主体としたもので、中間を貝殻腹縁によるキザミや圧痕文を加えるのが特徴となる。明神裏Ⅲ式に求められる。

・Ｅ群土器「第69図19～24・27・28・50」

斜縄文と羽状縄文の土器片であり、胎土に多量の繊維を含むことから前期初頭に位置するものと考えられる。

・Ｈ群土器「第69図25・26・29～31」

３本多条の斜縄文土器で石英砂を多量に含む。前期末の所産とみる。

・Ｎ群土器「第69図1・5・6・11・22・33・34・36・38」

太状の沈線文と稜線で文様を構成するものであるが、破片のために全体の構成は明確にできないが、概ね「Ｊ」字状文を配するものと考え綱取式に平行するものとみたい。

・Ｏ群土器「第69図2・3・7～10・41・42～46・51・52・55～57」

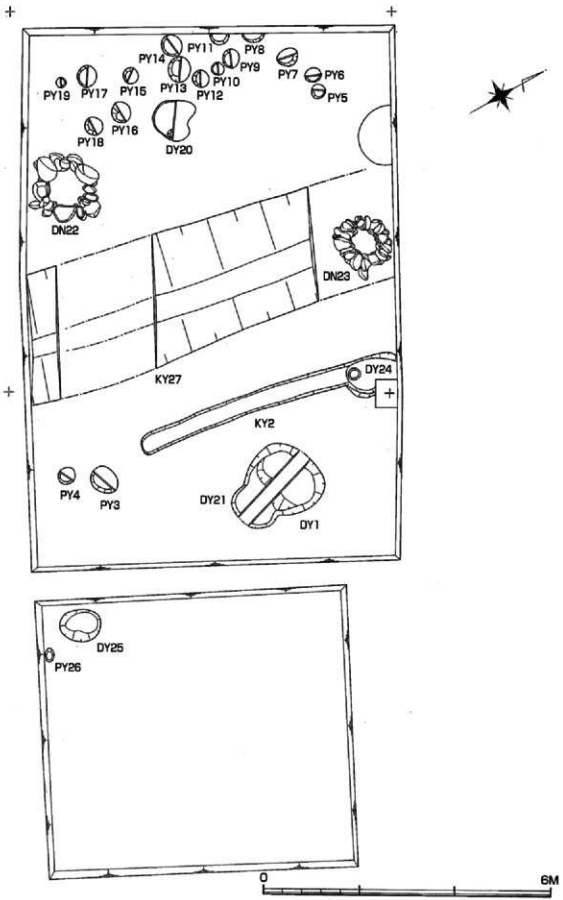
細線による文様と太状の沈線によるステッキ状文から堀之内１式に平行する土器群と突刺文を多様する三十稲葉式の土器群を一括した。

・Ｐ群土器「第69図32・37・53・54」

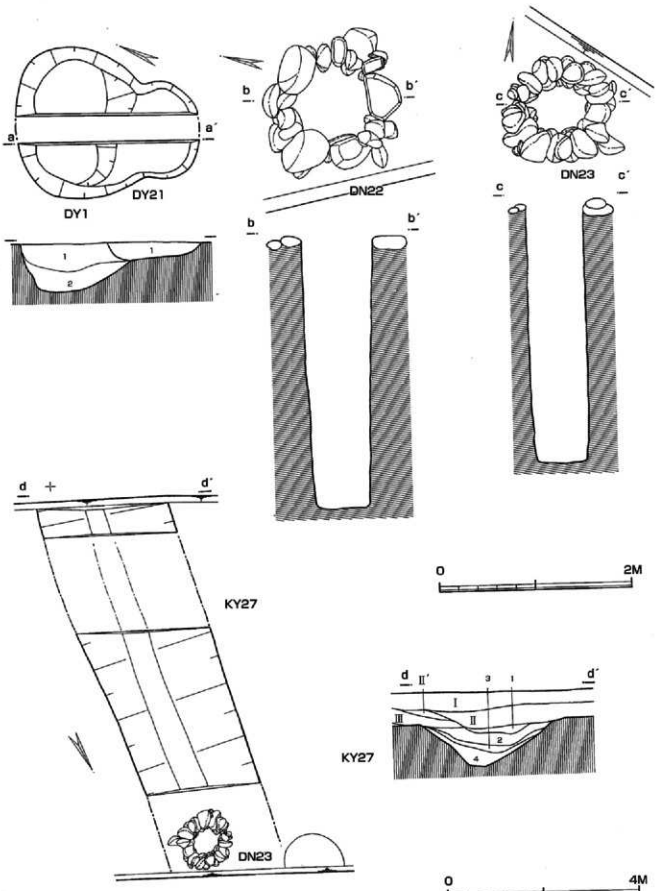
破片であるが、沈線文で単位文様を構成する仲間で、宝ケ峰式に平行するものとみたい。

・Ｑ群土器「第69図59」

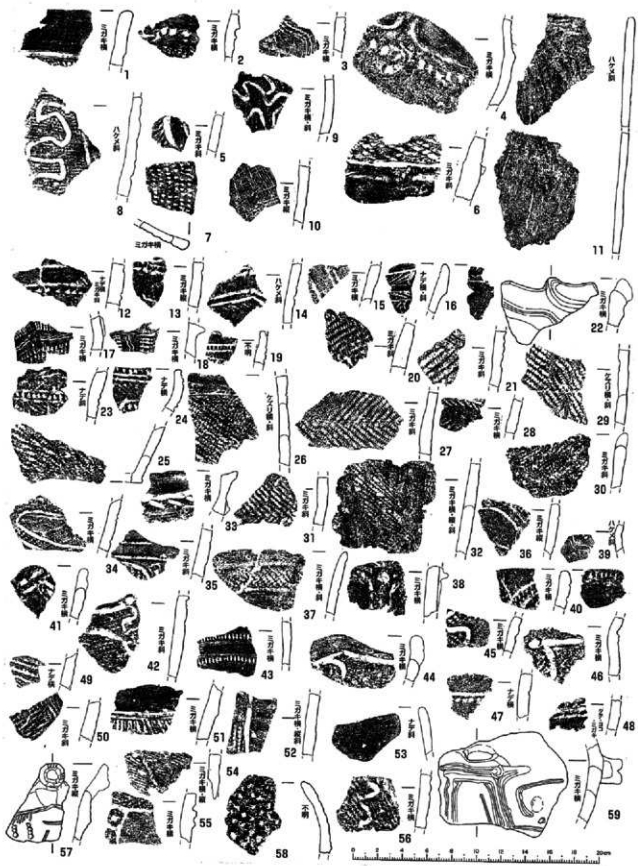
隆線を突起状に配し、沈線文を方格状に配したものであり、十腰内式に類例がある。



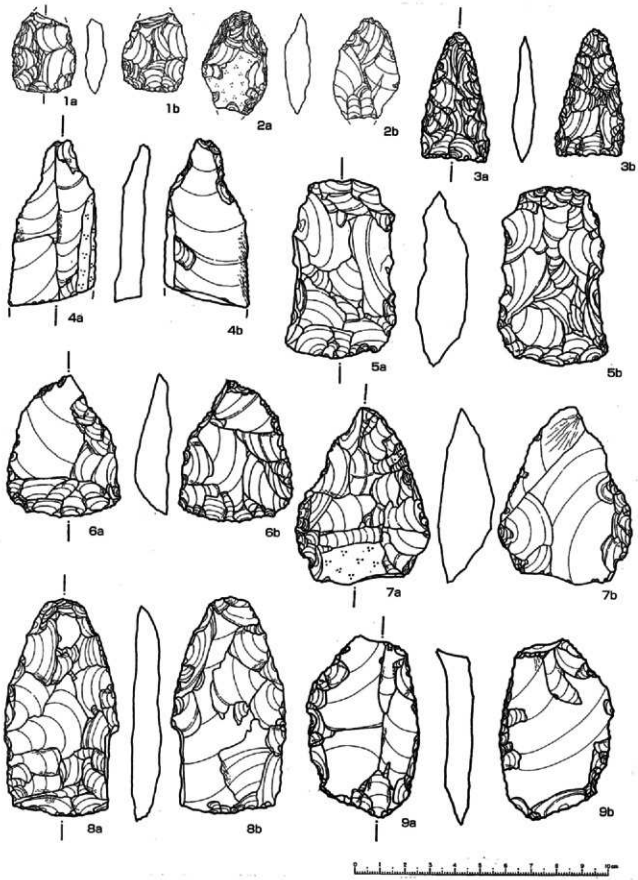
第67図　大樽遺跡第8次調査遺構全体図



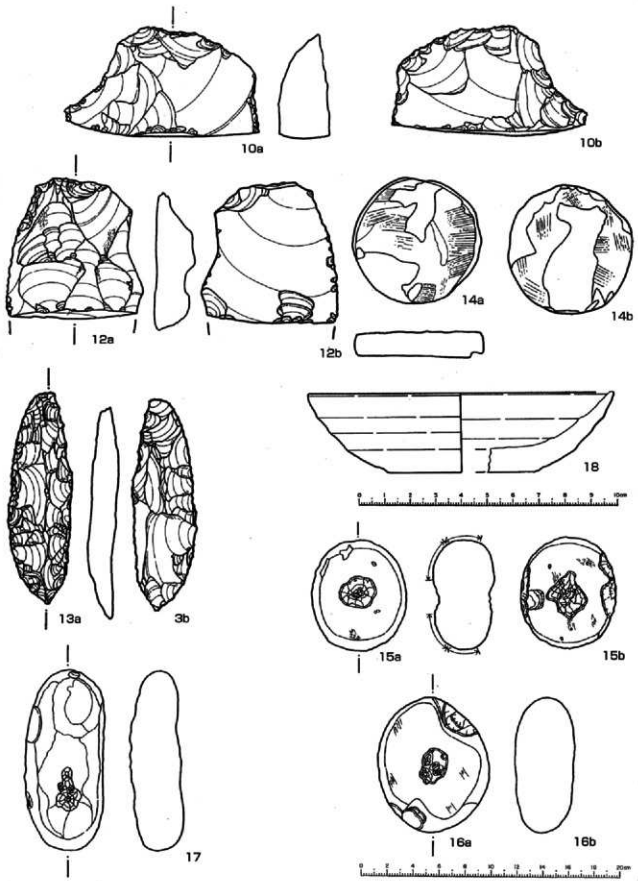
第68図　大椚遺跡第8次調査土壙・井戸・溝跡平面図



第69図　大樽遺跡第8次調査出土土器拓影図



第70図　大樽遺跡第8次調査出土石器実測図



第71図　大樽遺跡第8次調査出土土器・石器実測図

第Ⅶ節　大樽遺跡 第９次調査

１．検出遺構

今回の調査区は２箇所あり、便宜上北側をＡ区、南側Ｂ区と呼称した。第８次調査で検出された　今回の調査で検出された遺構は153基確認された。これらの遺構は、縄文早期～後期及び中世に属するものである。今回検出された遺構にはＤＹ（土壙）80基、ＰＹ（ピット）73基ありここでは、縄文時代を中心として遺構の種別に沿って概述する。

１）土　　壙

ＤＹ59「第67・68図」

Ａ調査区の東側中央部のピット群が密集する付近で確認された。重複関係はない。平面形は不正形を有する。確認長径（1.1ｍ）、深さ41㎝を測る。埋土は５層に分けられ、底部はほぼ平坦で、掘り方は西側が緩やかである。出土遺物は後期の遺物であることから、縄文後期に属するものと判断される。

ＤＹ68「第72・73図」

Ａ調査区の南側壁面で確認された。重複関係はない。平面形は不正形を有する。確認長径（1.7ｍ）、深さ82㎝を測る。埋土は５層に分けられる。底部は西側が垂直に近く、東側が緩やかに堀込んでいる。前期末と後期の遺物が出土していることから、縄文後期に属するものと判断される。

２．出土土器

・Ｂ群土器「第74図1・8・20」

貝殻腹縁圧痕文を横位に展開したもので、大寺式の特徴をもつ。

・Ｅ群土器「第74図3・4・16～18」

多量の繊維質を含むのが特徴で、羽状縄文の土器片の他に16のように撚糸圧痕文が伴うものもある。花積下層式に平行するものとみたい。

・Ｇ群土器「第74図2・5～7」

口縁部付近に施文する横位の半截竹管文が特徴で、縦長の深鉢形を示すことから大木４～５式に平行するものと考えられる。

・1群土器「第74図9・10・19」

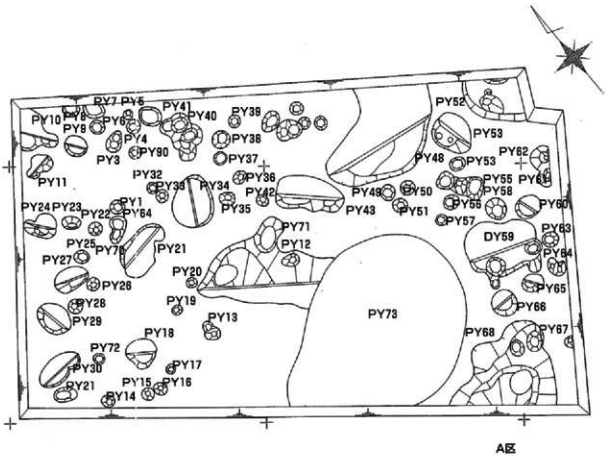
地文の斜縄文に渦巻文や方格状の粘土紐を貼付したもので、大木８ａ式の特徴をもつ。

・Ｎ群土器「第74図11」

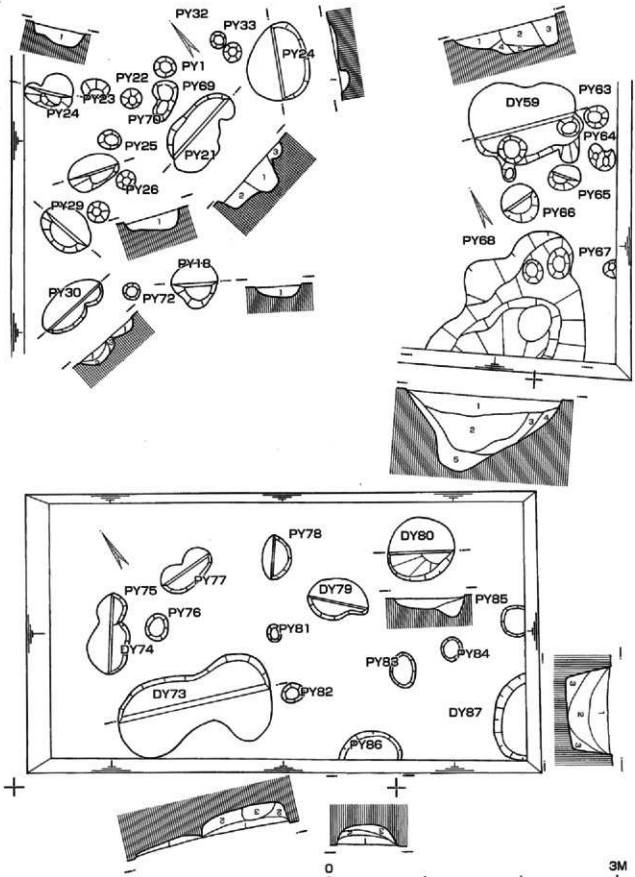
太状の沈線文で変形の「Ｊ」字状文を構成するものであり、綱取式に平行する。

・Ｏ群土器「第74図12～15・21～33」

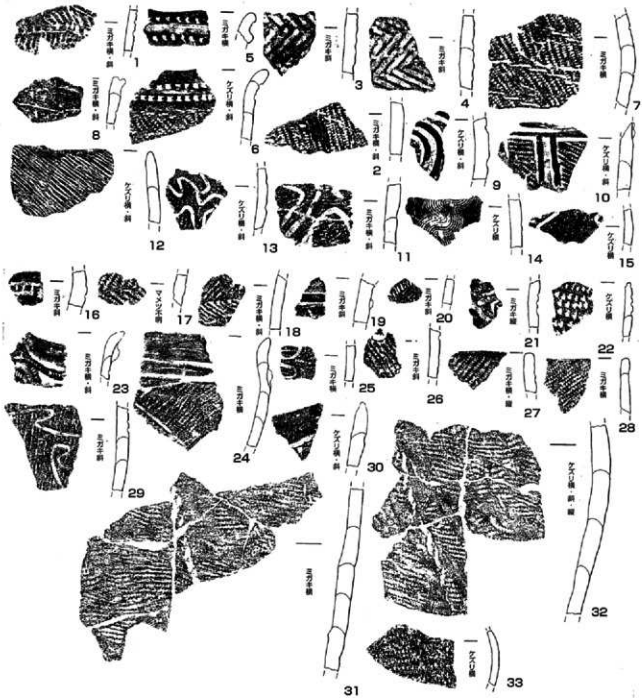
細線による「Ｓ」字状連続文や太線によるステッキ状文等の堀之内１式土器と主体にして僅かに突刺文を多用した三十稲葉式土器も含んでいる。



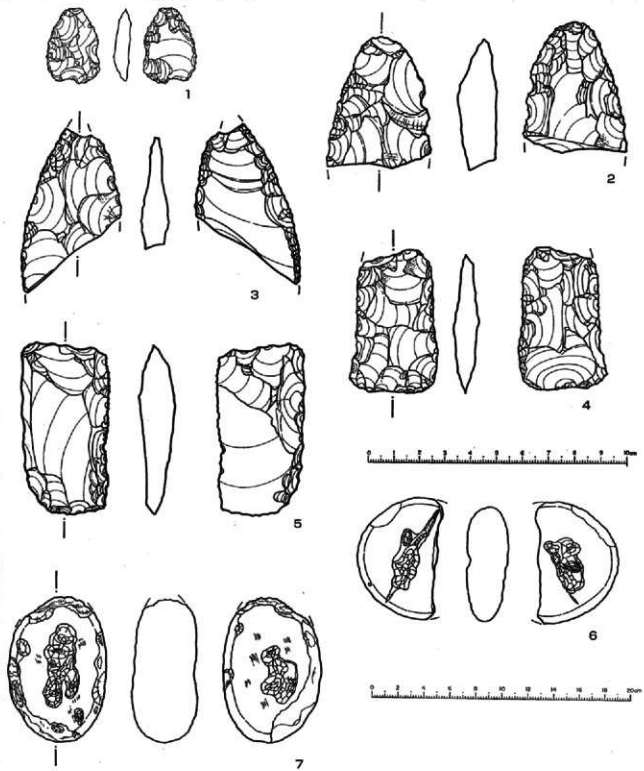
第72図　大椙遺跡第9次調査遺構全体図



第73図　大樽遺跡第9次調査土壙平面図



第74図　大樽遺跡第9次調査出土土器拓影図



第75図　大樽遺跡第9次調査出土石器実測図

米沢市の縄文土器編年表

表－4

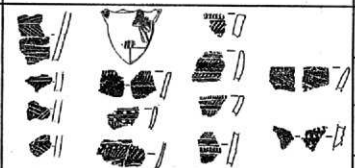
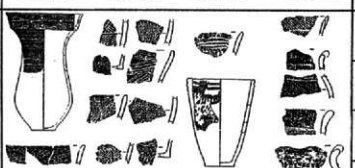
1998　手塚

1万年前		大樽遺跡出土土器	米沢	関東	東北南部	東北北部	新潟県	
	草			後野		大平山元Ⅰ		
			(+)	橋立Ⅰ	日向Ⅰ			
	創			花見山	一ノ沢Ⅰ		小瀬ガ沢1	
				西鹿田				
	期			西谷	火箱岩	鴨平	小瀬ガ沢2	
8,000				大谷寺	一ノ沢Ⅱ	亀泉新洞		
				井草Ⅰ	一ノ沢Ⅳ			前
			+	大丸　井草Ⅱ	一ノ沢Ⅴ			
			+	夏島	尼子			
			桑山Ⅰ	稲荷台	竹之内Ⅰ	日計	小瀬ガ沢3	
	早		+	大浦山　稲荷原　花輪台	竹之内Ⅱ		木ノ木	
			+	平坂　普門寺				葉
			桑山Ⅱ	三戸	大平	白浜	卯ノ木	
		大樽A群土器	桑山Ⅲ・大樽Ⅰ	田戸下層	須刈田	小船渡平		中
		大樽B群土器	桑山Ⅳ・大樽Ⅱ	田戸上層	大寺　常世	物見台	樽田　小坂平	
		大樽C群土器	桑山Ⅴ・強得寺	子母口	明神裏Ⅲ			
			桑山Ⅵ	野島	槻木Ⅰ	ムシリⅠ		葉
			桑山Ⅶ	鵜ケ島台	素山Ⅱ	赤御堂		
			横山Ⅰ	茅山下層	上川名Ⅰ			後
	期		横山Ⅱ	茅山上層				
			+	+				
			+	+　打越Ⅰ	梨木畑	早稲田Ⅴ		
			慶治清水B	神之木台　打越Ⅱ				葉
6,000		大樽D群土器	板谷Ⅰ	下吉井	船入島下層	長七谷地		
			塔ノ原Ⅰ					前
	前	大樽E群土器	八幡原BⅠ・窪平Ⅰ	花積下層	上川名Ⅱ	尾鮫	布目	
			大樽Ⅲ・窪平Ⅱ					
			窪平Ⅲ	関山Ⅰ	桂島	表館		
		大樽F群土器	一ノ坂Ⅰ・松原					
			一ノ坂Ⅱ・大樽Ⅳ	関山Ⅱ		深郷田		
			横山Ⅲ・板谷Ⅱ		大木1	円筒下層a		
			板谷Ⅲ	黒浜　植房	大木2a	円筒下層b1	刈羽	葉
			常楯B	諸磯a　浮島Ⅰ	大木2b			
			窪平Ⅳ		大木3	円筒下層b2	泉龍寺	中
		大樽G群土器	塔之原Ⅱ	諸磯b　浮島Ⅱ	大木4	円筒下層c		葉
			八幡原AⅤ		大木5	円筒下層d1	鍋屋町1	
	期	大樽H群土器	八幡原AⅡ・大樽Ⅴ	諸磯c　浮島Ⅲ	大木6古	円筒下層d2	鍋屋町2	後
			八幡原AⅢ	十三菩提　興津	大木6新			葉
5,500			台ノ上Ⅰ					
			台ノ上Ⅱ	五領ケ台Ⅰ	糠塚		+	前
	中		台ノ上Ⅲ・成島Ⅰ	五領ケ台Ⅱ　下小野	大木7a	円筒上層a		
				清水台　阿玉台Ⅰa			栃倉1	
			台ノ上Ⅳ・成島Ⅱ	阿玉台Ⅰb	大木7b	円筒上層b	長者ガ原	葉
				勝坂Ⅰ　阿玉台Ⅱ		円筒上層c		
		大樽I群土器	台ノ上Ⅴ・大樽Ⅵ	勝坂Ⅱ　阿玉台Ⅲ	大木8a	円筒上層d	馬高1	
						中の平Ⅰ		中
			台ノ上Ⅵ・窪Ⅰ	勝坂Ⅲ　阿玉台Ⅳ		榎林Ⅰ	馬高2	
		大樽J群土器	台ノ上Ⅶ・窪Ⅱ・大樽Ⅶ	加曽利EⅠ	大木8b			葉
			台ノ上Ⅷ			榎林Ⅱ	馬高3	
	期		台ノ上Ⅸ・窪Ⅲ	加曽利EⅡ	大木9a			
			窪Ⅳ			中の平Ⅲ	栃倉2	後
		大樽K群土器	窪Ⅴ・大樽Ⅷ	加曽利EⅢ古	大木9b			
			八幡原BⅠ・花沢AⅠ		大木10a		大平	
		大樽L群土器	八幡原BⅡ・大清水	加曽利EⅢ新	大木10b			
			八幡原BⅣ・花沢AⅡ					
			大堀		大木10c			葉
4,000		大樽M群土器	大樽Ⅸ・竹井境AⅠ		+			
		大樽N群土器	大樽Ⅹ・横山Ⅳ	称名寺	綱取Ⅰ	門前	+	前
	後	大樽O群土器	竹井境AⅡ・大樽Ⅺ	堀之内Ⅰ	綱取Ⅱ	大曲Ⅰ	三十稲場1	
			竹井境AⅣ	堀之内Ⅱ	南境	大湯	三十稲場2	葉
		大樽P群土器	竹井境AⅤ・大樽Ⅻ	加曽利BⅠ		十腰内Ⅰ		
			左沢Ⅰ	加曽利BⅡ	宝ケ峰	十腰内Ⅱ	+	中
			+				三仏生	
		大樽Q群土器	左沢Ⅱ・大樽ⅩⅢ	加曽利BⅢ		十腰内Ⅲ	塔ガ峰	葉
			左沢Ⅲ	曽谷	西ノ浜	十腰内Ⅳ		
			+					後
	期		上ノ町	安行Ⅰ			+	
			+					
3,000			+	安行Ⅱ	金剛寺	十腰内Ⅴ	上山	葉
			普門院	安行Ⅲa	大洞B^1・B^2	大洞B^1・B^2	石倉1	前
	晩		清水北C	安行Ⅲb　姥山	大洞BC	大洞BC	石倉2	葉
			丹南Ⅰ	安行Ⅲc　前浦Ⅰ	大洞C^1	大洞C^1	朝日1	中
			丹南Ⅱ	安行Ⅲd　前浦Ⅱ	大洞C^2	大洞C^2	朝日2	葉
			釜代Ⅰ	杉田Ⅲ　千網	大洞A	大洞A	藤橋	後
	期		釜代Ⅱ	荒海	大洞A′	大洞A′	鳥屋	
2,000					福浦島下層	砂沢	緒立	葉
			弥生時代					

＊　山内清男・林　謙作・小林達雄氏らによるものを参考に作成した。
（＋）は該当する土器が見つかっていないもの。＋は土器はあるが、編年に至らないもの。

大樽遺跡出土土器分類表

表－5

時期	大樽遺跡出土の土器	大樽遺跡出土土器形態分類	第Ⅲ次調査	第Ⅳ次調査	第Ⅴ次調査	第Ⅵ次調査	第Ⅶ次調査	第Ⅷ次調査	第Ⅸ次調査
縄文早期	 A群土器 B群土器 C群土器 D群土器	A群土器			○		○		
		B群土器	○	○		○	○	○	○
		C群土器	○		○	○		○	
		D群土器		○					
縄文前期	 E群土器 F群土器 G群土器 H群土器	E群土器	○	○	○	○	○	○	○
		F群土器	○	○	○				
		G群土器		○		○			○
		H群土器		○	○			○	
縄文中期	I群土器 J群土器 K群土器 L群土器 M群土器	I群土器		○	○				○
		J群土器		○			○		
		K群土器		○			○		
		L群土器		○			○		
		M群土器	○	○					
縄文後期	N群土器 O群土器 P群土器 Q群土器	N群土器	○	○	○	○		○	○
		O群土器	○	○	○	○	○	○	○
		P群土器	○	○	○	○	○	○	
		Q群土器	○	○		○		○	

第Ⅷ節 天神裏古墳

1．遺跡の概要

米沢市街地から北東約5㎞の大字長手字天神裏地内に位置する。古墳は南北に細長く延びる長峰山丘陵の北端部に立地する。古墳は「エゾ穴」と地元では呼ばれ、古代の住居として使用していたと語り継れてきたようだ。

古墳は丘陵東方箇所に一基だけ確認され、周辺は水田で占められる。後世の土地利用や遺物愛好者の試掘によって、天井石は一枚だけ残在していた。この箇所から奥壁が見え、「エゾ穴」と呼ばれる風景を呈す。現状は山林であるが、丁度地主が木を伐採した直後であり、遠方からも墳丘が確認できた。この長峰山は石切場でもあり、凝灰石の石材を産出してきた。

2．調査の概要

調査は、古墳墳丘の測量から開始した。その後東西南北の4箇所にトレンチを配し、掘り下げを開始した。トレンチはA－Dと各箇所に命名し（図参照）、深さはその箇所に応じて、対応することにした。

その結果、Bトレンチからは多量の焼土や焼成を受けた礫石が認められた。側壁を破壊して焼土は玄室までおよんでいた。すなわち、玄室の大半の埋土は後世に堆積したものと理解されるのである。この状況は墳丘の東方から削平したことを示している。

Aトレンチは墳丘の自然堆積状況に重点を置き掘り下げた。この箇所は古墳構築時期の現状をとどめていると理解され、腐植土を除去した段階で掘り下げを中止した。

Dトレンチの北方箇所にある落ち込みは風倒木壙と考えられる。この箇所もAトレンチと同様に腐植土を除去して終了する。Dトレンチは古墳の主体部に沿って配置した。羨道の天井石はすべて破壊された痕跡を有し、杉の切株が羨門中央にあった。前庭部も削平された状況を示し、多様の礫石が散乱していた。前庭部下場は泥炭層が若干認められ、一時期沼地か湿地であったことがうかがわれる。調査期間は平成10年7月6日から同年7月17日の延べ12日間であった。

3．検出遺構と出土遺物

天神裏古墳は古墳として成立した後に、近年数回の削平・破壊され今日に至ったものとみられる。ここでは今回の調査で確認した遺構について説明したい。

1）墳　　丘　（第77図参照）

山麓を削り出して墳丘を盛り上げたものである。各トレンチとも明確に周溝を示すセクションは得られなかったが、現地状況から判断して約10mの墳丘を有する山寄式の円墳と推測される。玄室は、東南側に開口した横穴式石室で、玄室の天井石や側壁の大半は破壊され、玄室内部に墳丘の盛土を埋め戻している。玄門は残在しているが羨門は完全に失われている。

現存する石室から想定される主体部としては、玄室幅1.7m長さ2.5m羨道の長さが26m幅

80㎝高さは推定で80㎝～１ｍの全長約5.1ｍを測る。凝灰岩の割石を主体に積み上げ、天井に向かうと幅が狭くなる構造である。断面形態が櫛型になる持ち追り工法を示す。奥壁は一枚石を使用している。

前庭部は削平されて不明であるが、全体の形状から推測される主体部の長は少なくとも６ｍ前後と想定される。側壁の裏側には30㎝の割石が裏込として使用されている。遺物は数回に亘って遺物愛好者の手で、持ちさられたと考えられる。埋土から直刀の鍔、底面西南側壁付近からも直刀の鍔、鉄鏃が出土しているが、いづれも埋納当時の場所ではなく、後世に動いた状況で出土している。鍔は３点、鉄鏃は約30本分の破片が出土している。その他に羨道埋土上面から須恵器甕片が４点出土している。いづれも少破片である。

2）出土遺物

直刀鍔３点、鉄鏃は破片で云うと100点ある。鏃身（ぞくしん）、基部篦代（のべしろ）から想定すれば前述した数なると推測される。第79図に示した１と３は全体の半分が残存するものであり、１は12.3ｍの楕円形を有し、厚さは6㎜である。３は10.6㎝のほぼ円形を有する形態で、両者とも方形のすかし装飾をほどこす。２は直径6.5㎝、短径4.8㎝の円形を示す形状で、厚さ3㎜と両者にくらべて薄い。いづれも８窓透かしを有するものと推測される。中央部には直径3㎝、短径1.5㎝の長円形状の篠（ささ）を持つ。

鉄鏃は、全体の形態がわかる3本を図化した。完形の４は全長16.8㎝を測る。尖端部の断面形態は長方形、中間は方形、基部は丸形である。尖端部の形態は丸味を有すタイプと５、６のようにやや角ばるタイプの２形態が認められる。基部には木片が認められる。基部の形態はいづれも同様である。少破片の中には接着している例もあり、何十本単位でまとめて、埋納したことがうかがえると言えよう。その他の遺物としては須恵器片がある。

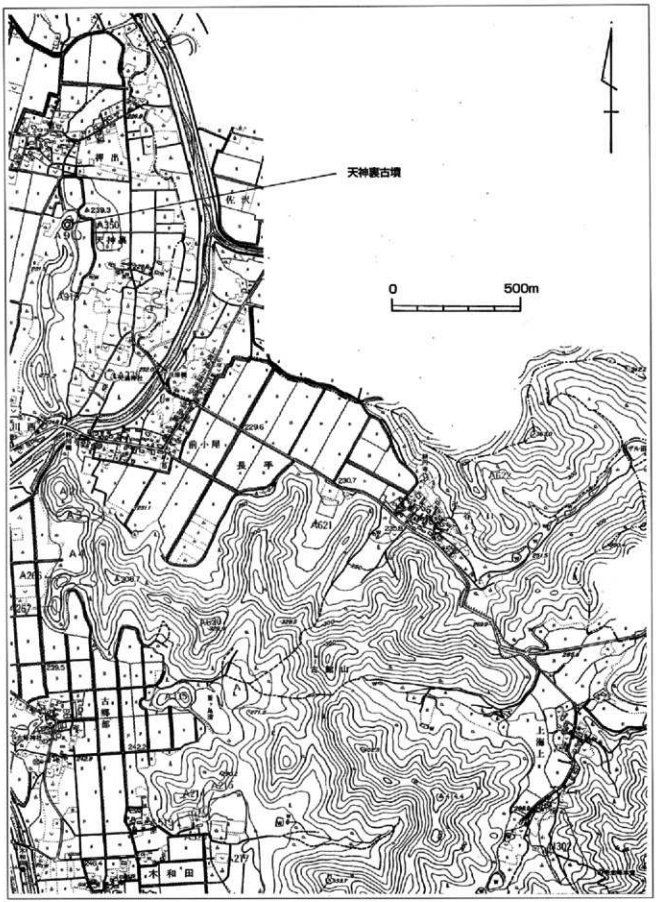
４．まとめ

地元で「エゾ穴」と呼ばれていた箇所が古墳であることは、今回の調査で明確になった。しかしながら、この箇所を掘れば、何かが出てくる、すなわちエゾ穴、古墳、先住民の住居と言った、何らかの認識はあったことは明確である。

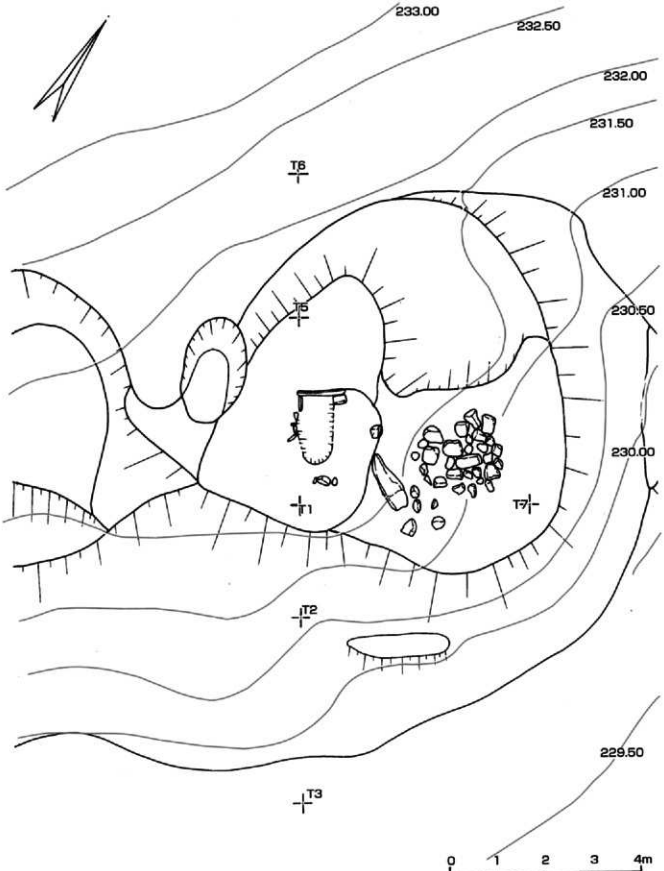
今回調査した古墳は本県でも、米沢市・高畠町・南陽市の東南置賜地区しか認められない埋葬形態である。本市には戸塚山古墳群を中心に約250基と推測されている。これらの中で構築当時に形態を有するのは数10基にすぎないと認識している。これは古墳が群集する場所が南方や西方といった日当たりの良い場所にあるため、土地利用の際に、やむなく、破壊されたものが一つの要因であろう。

これらの状況の中で、昨年度は木和田古墳、今年度は天神裏古墳、後述する長手古墳を調査した。墳丘全体、あるいはその地域全体が消滅した場合は痕跡をとどめないのは、当然である事が証明された調査であったと言えよう。

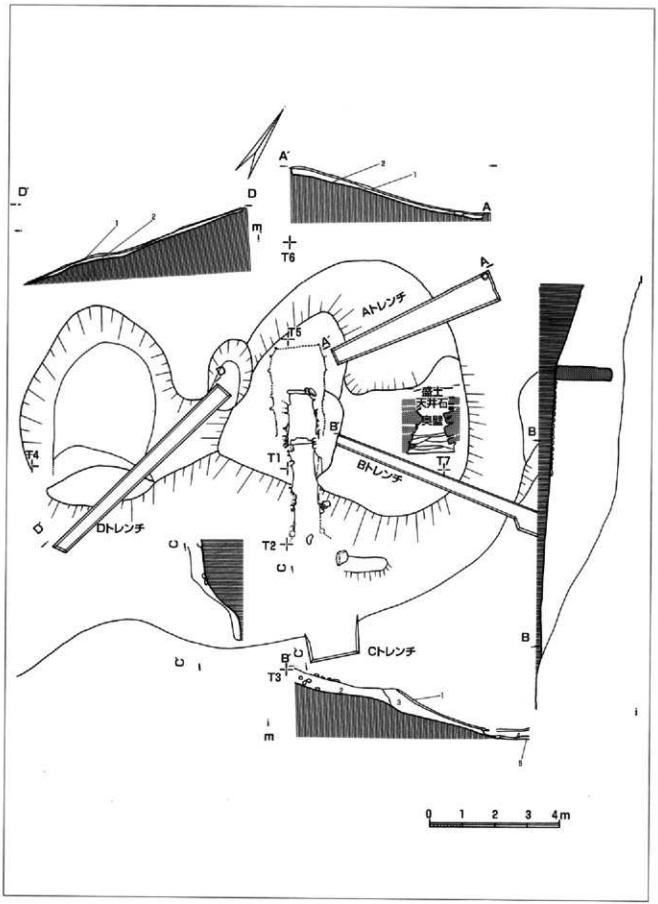
今回の調査にあたり、快く承諾していただきましたことや、伝世の話を聞かせていただきました地主さん、ご協力いただきました長手地区の皆様に感謝申し上げます。



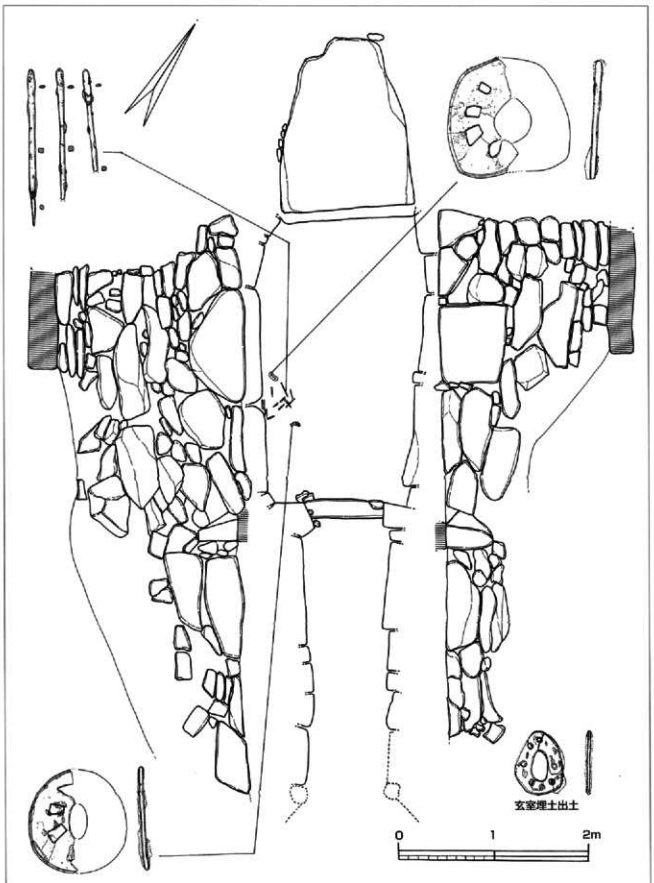
第76図　天神裏古墳位置図



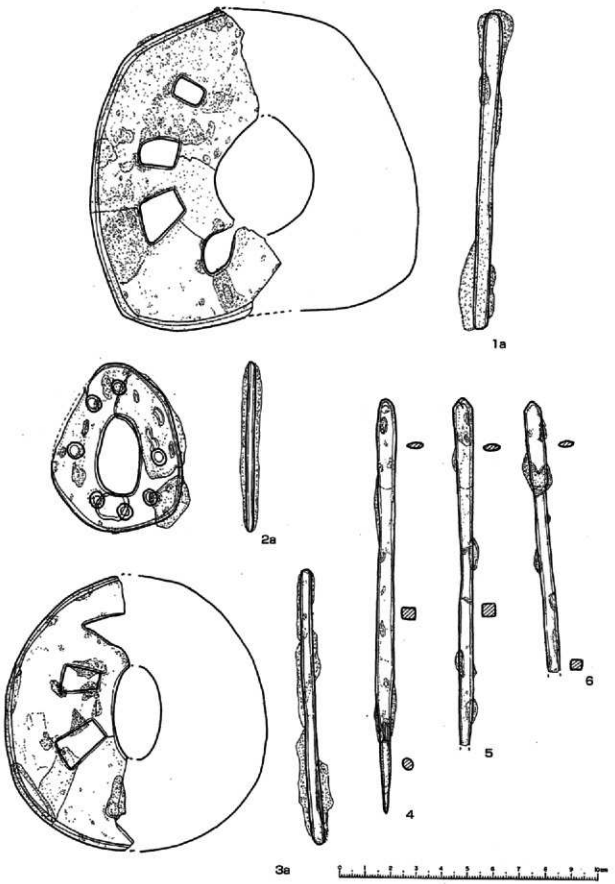
第77図　天神裏古墳現況測量図



第78図　天神裏古墳トレンチ配置図



第79図　天神裏古墳主体部展開図



第80図　天神裏古墳出土遺物実測図

第Ⅸ節　長手４号墳

１．遺跡の概要

米沢市街地から北東部約４kmの大字長手字城山地内に位置する。古墳の立地する城山は、伊達氏の家臣と伝えられている綱代伯耆守の館跡「長手館」（別紙参照）が存在する。

古墳は、城山の南山麓から尾根にかけて５基が分布すると推測されていたが、後世の城構築によって３号墳～５号墳が大幅に改築されており、昭和58年に調査確認した１号墳と２号墳以外の古墳については、古墳と疑問視する向きもあった。今回は、古墳と推測されている墳丘のうち、その破壊が著しい４号墳を対象としたものである。

２．調査の概要

調査は、古墳と推測される４号墳を中心として、ほぼ南北と東西の２本のトレンチを配して行うことにした。現状の測量調査を行ってから東西のトレンチを設定して掘り下げる一方、南北のトレンチも平行して進めることにした。

ところが、東西トレンチを約40cm下げた段階で、古瀬戸瓶子が横転した状況で出土し、付近から散骨を示す火葬骨が検出された。さらに、慎重に掘り下げてみると意図的に整地したと考えられる砂利層が竪穴式に堆積していることから墳丘を掘り込んで埋められたと判断された。また、南北のトレンチ上部からは板碑の破片も出土している。この段階で、中世墳墓との結論に達したが、念のために土層の確認をするためにさらに掘り下げたところ約150cmの面で古墳の玄室の一部と考えられる凝灰岩の側壁と奥壁が出現し、古墳を利用して墳墓を構築した特異な遺構であることが判明した。調査期間は平成10年（1998）12月11日から同年12月25日である。

３．遺構の概要

長手４号墳は古墳として成立した後に中世墳墓に再利用され、最終的に山城のテラスとして今日に至ったものとみられる。遺構の詳細について触れたい。

１）古　　墳「第81図」

山麓を削り出して墳丘を盛り上げたもので、東西トレンチの西方断面に構築当時の墳丘面が確認された。さらに、南側を除くトレンチで周構が認められていることから約10mの墳丘を有する山寄式の円墳と推測される。玄室は、ほぼ南側に開口した横穴式石室で、玄室の天井石や側壁の大半は中世墳墓の構築で破壊され、玄室内部に整地層とともに埋め戻されているが、玄門と羨道の天井石の一部と羨道部から羨門はその痕跡を残している。ただ、羨道の天井石に関しては、崩壊した際に南側に移動した可能性が強い。現存する石室から想定される主体部の規模は、玄室が幅1.8m長さ2.5m、羨道の長さが2.65m幅1.5m高さ1.0mの全長5.15mを測り、凝灰岩の切石をほぼ垂直に積み上げて構築したものとみられる。

前庭部は山城のテラスによって削平されたいることから不明であるが全体の形状から推測される主体部長は少なくとも6m前後と想定され、旧墳丘の状況から積算される玄室高は約1.8m

位を有していたと考えられる。側壁の裏側には30m前後の割石が多量に認められた。遺物としては、羨道の玄門寄りに須恵器坏2点と前庭部の羨門付近から土師器坏4点、須恵器坏1点、須恵器壷1点を出土しているが、玄室に関しては中世火葬墳墓の構築の際に清掃したものとみられ、遺物の痕跡は認められなかった。

出土した須恵器と土師器は、8世紀の前半と推測されるが、横穴式石室の特徴でもある追葬の可能性を考慮すれば、古墳構築年代に直結することは断言できない部分もある。

2）中世墳墓

古墳の主体部を破壊して埋め戻し、長さ約3.5m、深さ1.5mのほぼ円形の土壙状の主体部を掘り、内部に砂利層を整地した上部に古瀬戸瓶子を埋納したものと考えられる。墳丘は約14mの隅丸方形に整形しており、古墳の墳丘に約40cm程の盛土を行っている。

出土した瓶子は、13世紀後半期と推測される搬入古瀬戸瓶子であり、器内には火葬した人骨が多量に納められていた。器高が30.4cm、胴部最大径が17.8cm、口径6cm、底部8cmを有する短頸の古瀬戸瓶子で、土層に面した器面の一部の釉薬が剥落しているが全体に淡い灰緑色の自然釉が施された優品である。また、胴部亀裂部分に漆とみられる補修痕が確認されることで、ある程度の伝世期間を示唆するものとみたい。

墳丘の表土付近からは、板碑の破片4点が認められていることから墳墓構築後の供養碑として建立したと推測される。その後、中世の山城の構築によってテラス（帯曲輪）の一部に整地された時点で墳丘上の板碑が破壊されたものとみられる。

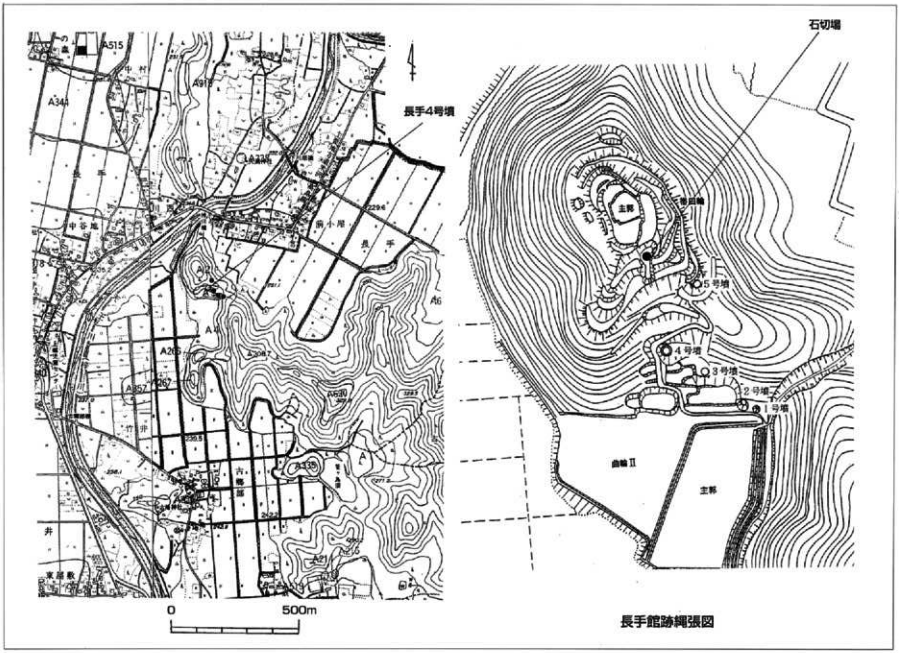
4．まとめ

今回の最大の成果は、古墳を中世期に再利用して墳墓として構築したもので、横穴式古墳の内部を利用した例は数多くあるが古墳自体を転用したのは極めて珍しいといえる。しかも、古瀬戸瓶子の出土例としては現在川西町吉田出土の2点（県指定文化財）が唯一であり、今回で、2列目となる貴重な資料といえる。

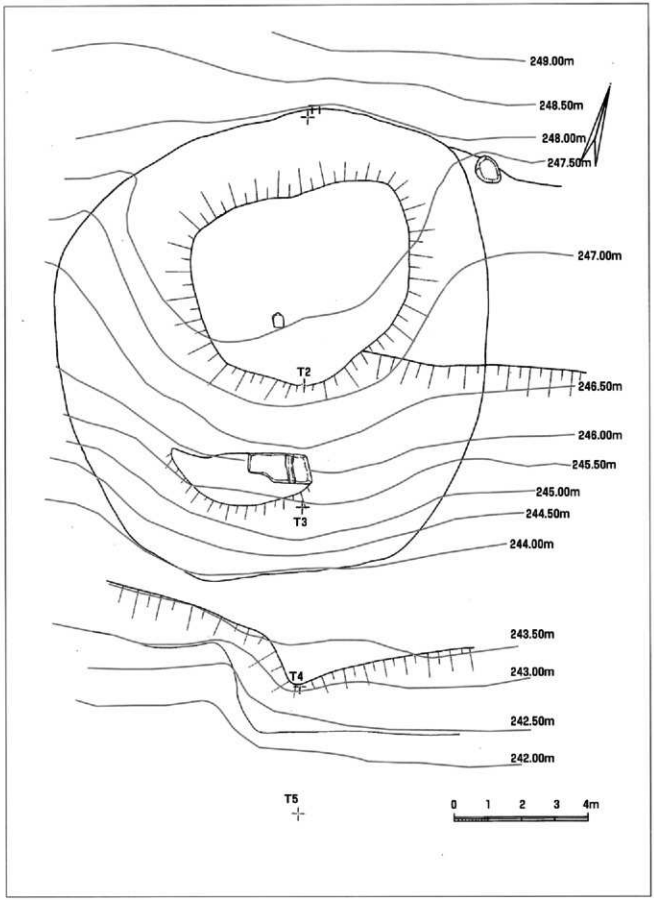
吉田出土の瓶子は底部付近でくびれを有しているが、長手の4号墳の瓶子はすんなりと底部に向かうのが特徴で、仙台市柳生台畑遺跡出土の瓶子に類似している。

瓶子の年代としては13世紀後半が妥当とみるが、前述したようにある程度の伝世期間が想定されることから埋葬年代は瓶子よりも新しいことを考えておきたい。ただし長手館の成立が遺構の形態から16世紀後半と推測されることから、館の年代を下降するものではない。米沢盆地を中心とした地域には、城館後・塚・墳墓・経塚・板碑など山形県内でも貴重な中世遺構が集中する地域でもある。しかし、中世遺構の調査資料は以外と少ないことも事実であり、今回の中世墳墓の発見は、これからの中世史を研究する上で貴重な成果となるものである。

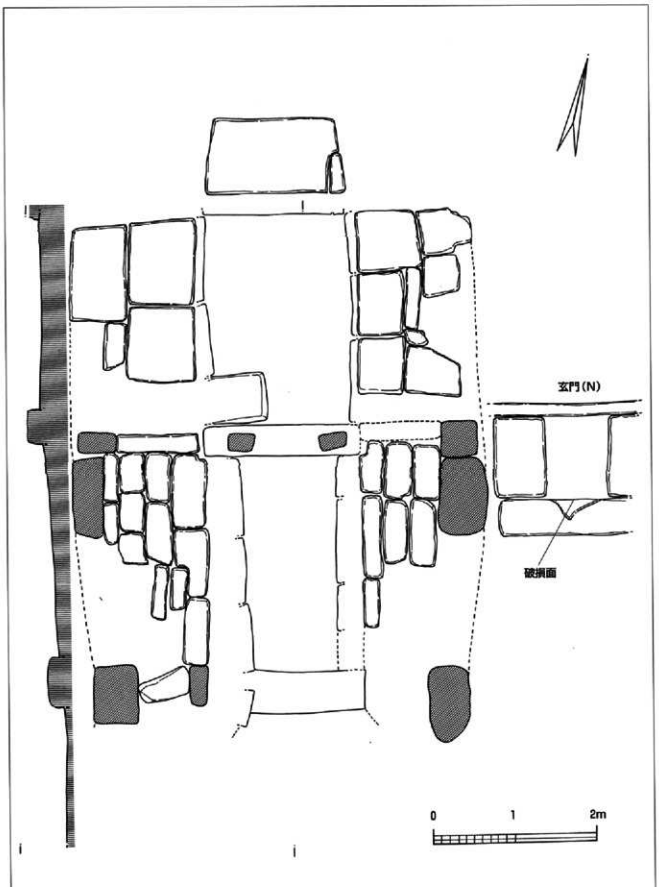
次に古墳は、長手2号墳と規模は同様であるが、2号墳は割石を多様した構造であるのに対して、今回の4号墳は主体部積石が大半を切石で構築する構造であり、相違がみられる。このことは、年代の特徴か埋葬者の身分の相違かは、今後の課題となるが群集古墳を解明する重要な資料を提供したものといえる。



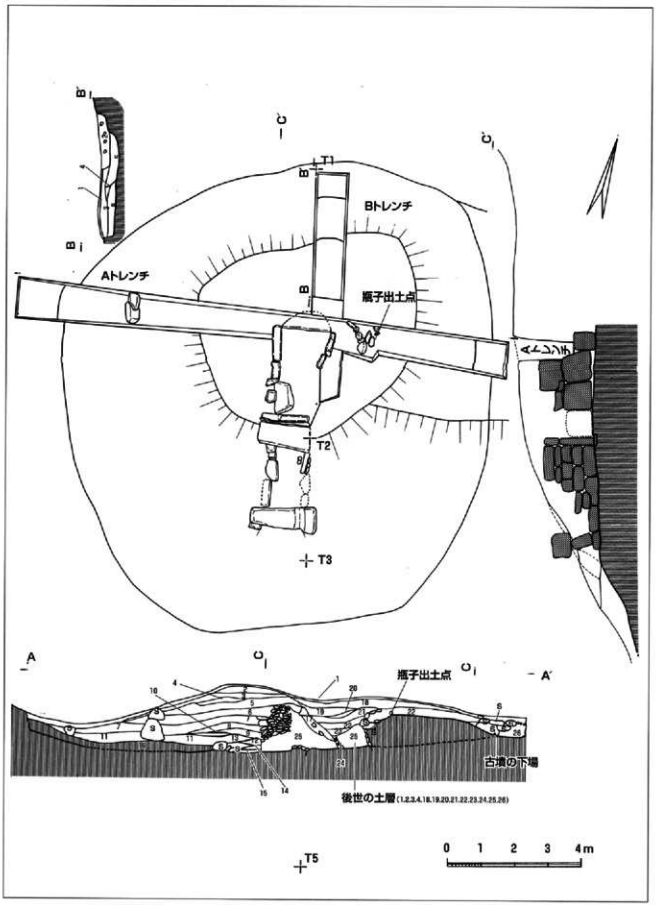
第81図　長手4号墳位置図



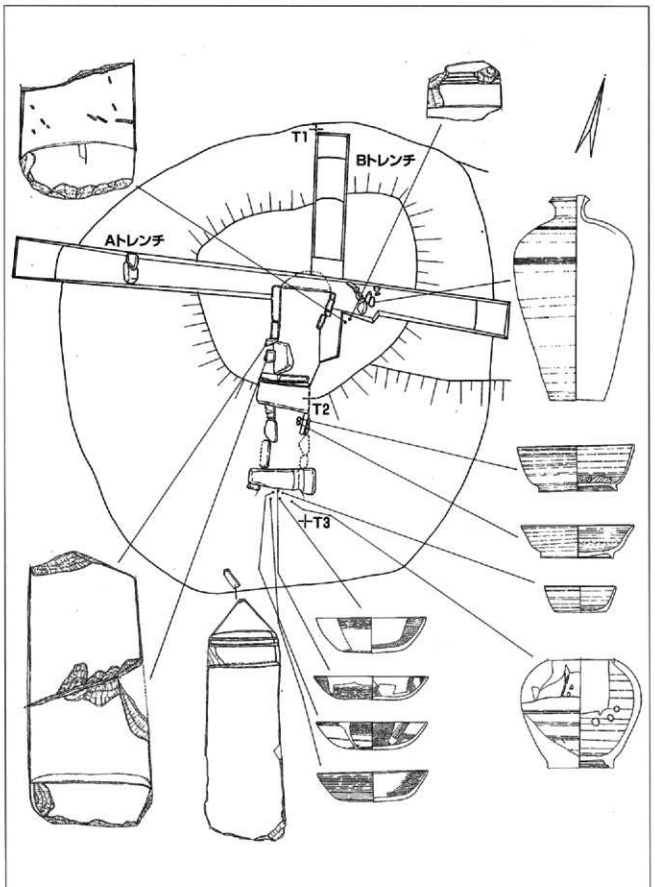
第82図　長手4号墳現況測量図



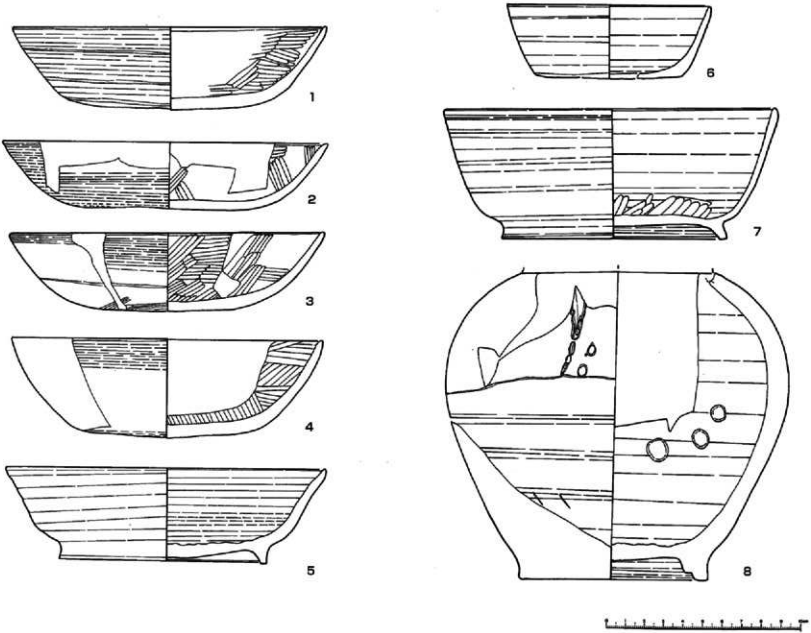
第83図　長手4号墳主体部展開図



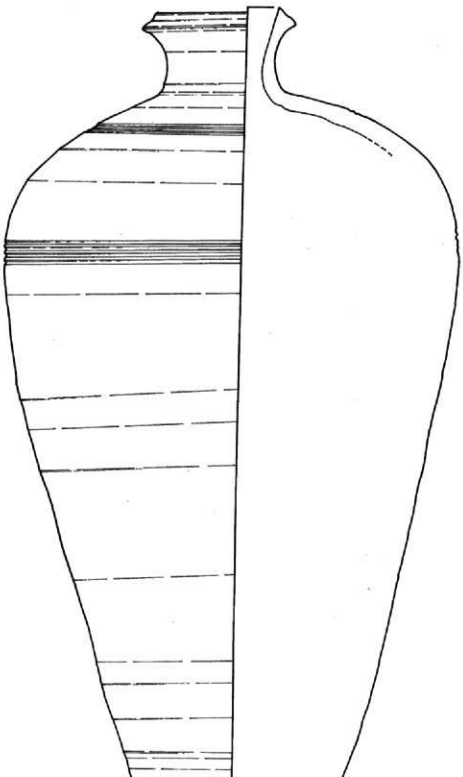
第84図　長手4号墳トレンチ配置図



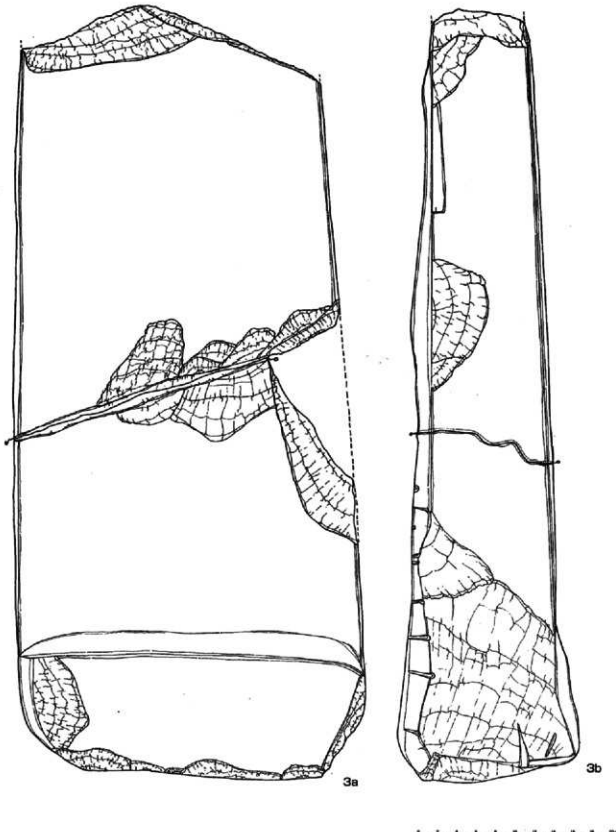
第85図　長手4号墳遺物出土点・平面図



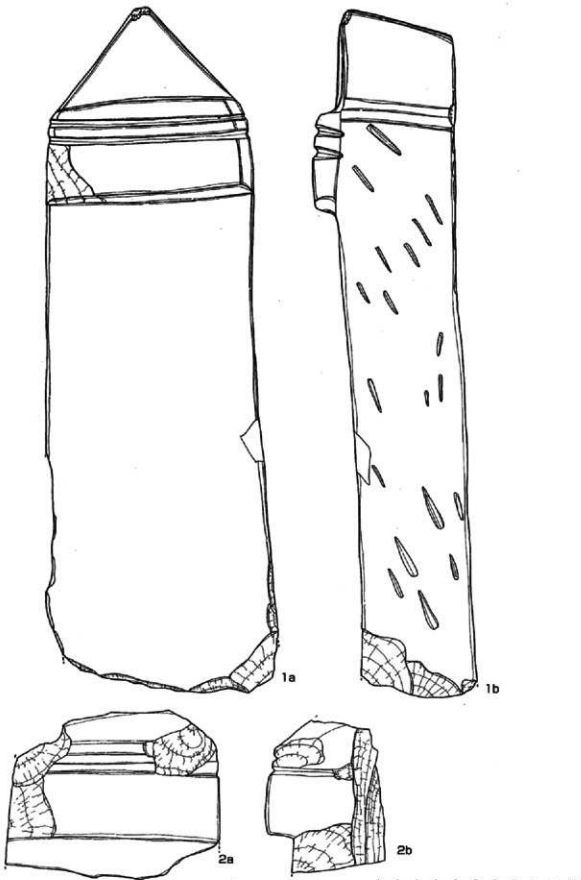
第86図　長手4号墳出土遺物実測図（1）



第87図　長手4号噴出土古瀬戸瓶子実測図（2）



第88図　長手4号墳墳丘出土の板碑実測図（1）



第89図　長手4号墳墳丘出土の板碑実測図（2）

報告書抄録

ふりがな	いせきしょうさいぶんぷちょうさほうこくしょ
書名	遺跡詳細分布調査報告書
副書名	
巻次	第12集
シリーズ名	米沢市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第65集
編著者名	手塚　孝・菊地政信・月山隆弘
編集機関	米沢市教育委員会
所在地	〒992-0012 山形県米沢市金池三丁目2番25号　TEL 0238-22-5111
発行年月日	西暦1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
大樽遺跡 第4～9次	山形県米沢市 舘山4丁目 地内	6202	G-150	37度 54分 36秒	140度 4分 25秒	19980422 ～ 19981023	4500	宅地造成
天神裏古墳	山形県米沢市 大字長手字天 神裏地内	6202	A-9	37度 56分 24秒	140度 10分 57秒	19980706 ～ 19980717	100	確認調査
長手4号墳	山形県米沢市 大字長手字城 山地内	6202	A-3	37度 55分 10秒	140度 9分 8秒	19981211 ～ 19981225	100	確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大樽遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡・集石遺構	縄文土器	集石遺構
天神裏古墳	古墳	7世紀末～8世紀初頭	石室	鉄鏃・鐸	
長手4号墳	古墳 墳墓	7世紀末～8世紀初頭・中世	石室	土師器・須恵器・瓶子	古墳を中世墳墓に再構築している

写 真 図 版

▲ 遺跡全景（南から）

▲ HY44住居跡（北西から）

▲ HY44住居跡（北西から）

▲ NN12集石遺構（西から）

▲ NN12集石遺構（西から）

▲ NN12集石遺構（北から）

▲ NN13集石遺構（北から）

▲ DY39土壙・NN15（南西から）

▲ 調査全景（東から）

▲ DN1井戸跡（南から）

▲ 遺物出土状況（南から）

▲ 遺物出土状況（南から）

▲ 遺物出土状況（南から）

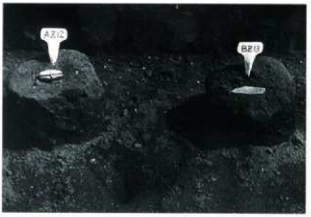
▲ 遺物出土状況（南から）

▲ 遺物出土状況（南から）

▲ 遺物出土状況（南から）

▲ 遺物出土状況（南から）

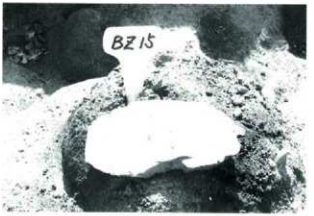
▲ 遺物出土状況（南から）



▲ 遺物出土状況（南から）

▲ 遺物出土状況（南から）

▲ 遺物出土状況（北東から）



▲ 遺物出土状況（南から）

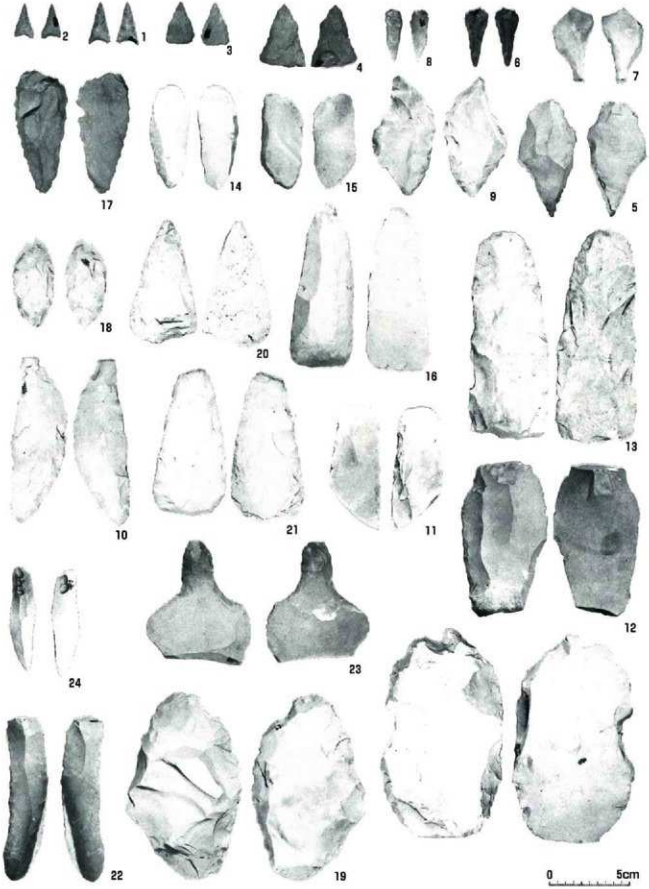
▲ 遺物出土状況（南から）

▲ 遺物出土状況（南から）

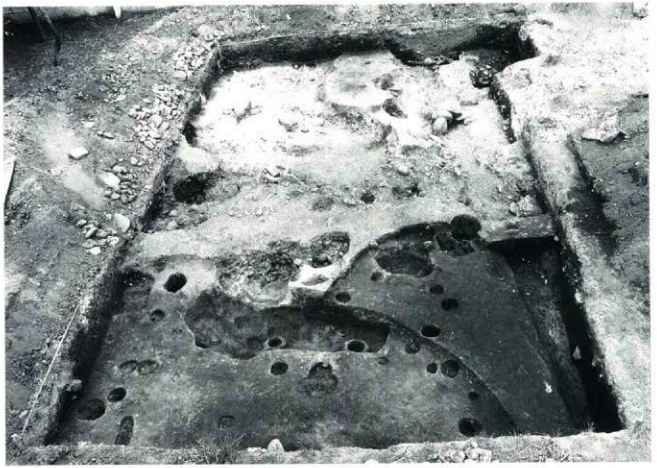
▲ 遺物出土状況（南から）

▲ 遺物出土状況（南から）

図版五　大樽遺跡第四次調査出土遺物



▲ 遺構全景「上層」（北から）



▲ 遺構全景「下層」（北から）

▲ DY４・５土壙（南西から）

▲ 調査全景（北から）

▲ DY７土壙（南から）

▲ DY15土壙（東から）

▲ DY６土壙（南西から）

▲ DY１土壙（南から）

▲ 遺物出土状況

▲ 遺物出土状況

▲ 遺構全景（南から）

▲ HY36住居跡（西から）

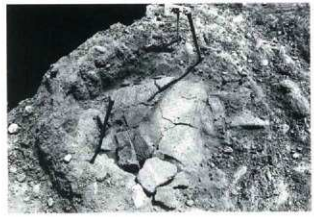
▲ DY68土壙・遺物出土状況（南から）

▲ DY68土壙・遺物出土状況（南から）

▲ HY36住居跡（西から）

▲ HY17住居跡（南東から）

▲ NN53井戸跡（南から）



▲ 遺物出土状況（西から）

▲ 第７次調査区全景（東から）

▲ 第７次調査風景

▲ A区遺構全景（南から）

▲ A区遺構全景（南から）

▲ B区全景（南西から）

▲ A区東側全景（南から）

▲ DY1・DY21土壙（南から）

▲ KY27堀跡（北西から）

▲ KY27堀跡（東から）

▲ KY27堀跡・DN22井戸跡（北から）

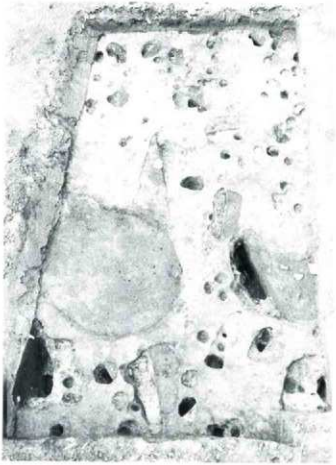
▲ KY27堀跡・DN22井戸跡（南から）

▲ KY２溝跡（南から）

▲ DN23井戸跡（北から）

▲ DN22井戸跡（北から）

▲ DN22井戸跡（南から）



▲ A区遺構全景（東上空から）

▲ A区遺構全景（東上空から）

▲ A区西側全景（南から）

▲ A区東側全景（南から）

▲ B区遺構全景

▲ DY48土壙（南から）

図版十三　大樽遺跡出土土器

4次

4次

4次

6次-2

4次

図版十四　大樽遺跡出土土器

4次

6次-1

4次-1

6次-3

4次

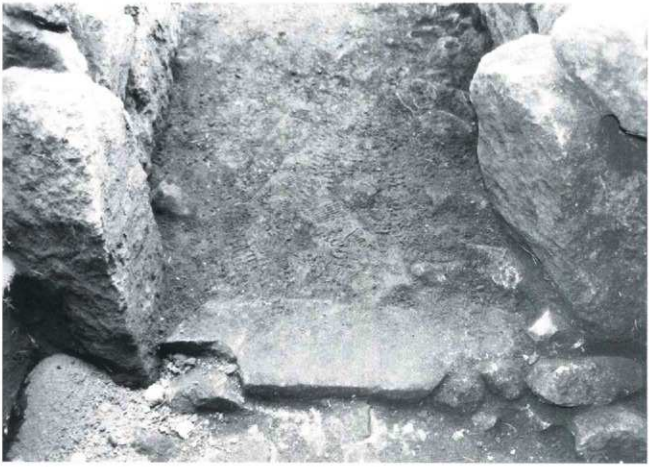
4次

▲ 墳丘全景（東南から）

▲ 調査前の状況（東方から）

図版十六　天神裏古墳

▲ 羨道全景（東南から）



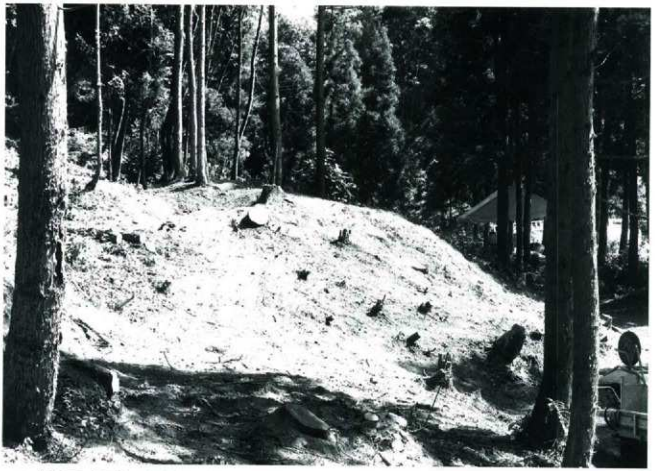
▲ 玄室から玄関柩石を望む全景（北方から）

図版十七　天神裏古墳

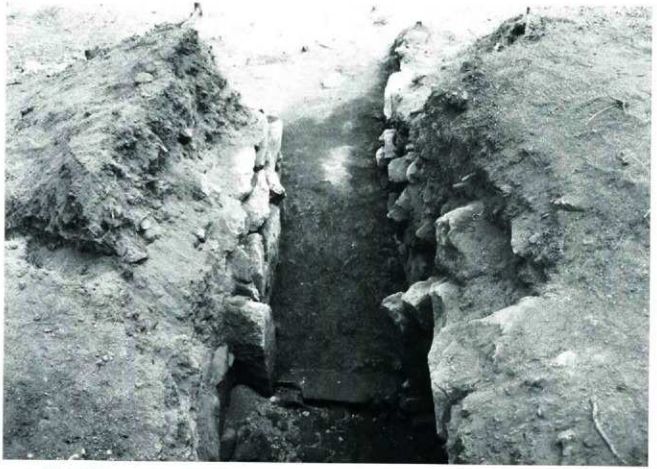
▲ 羨道箇所調査風景（東南から）

▲ 鉄鏃出土状況（北方から）

図版十八　天神墓古墳

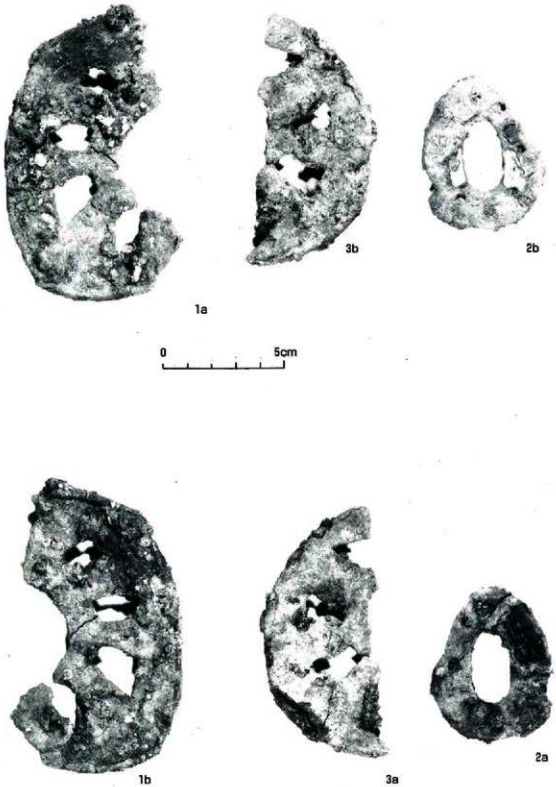


▲ 埋め戻し完了後の墳丘近景（南東から）

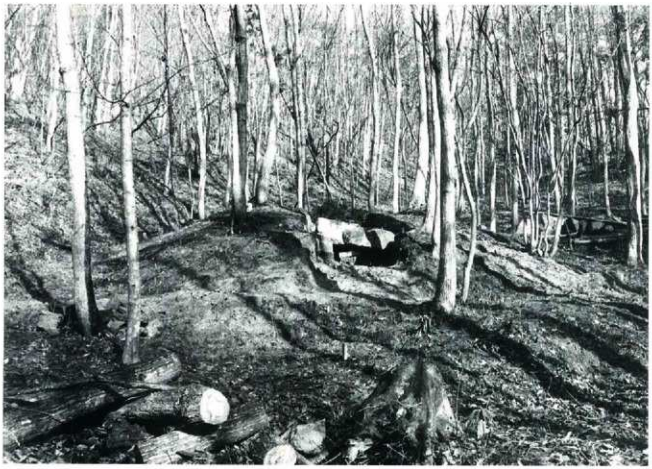


▲ 玄室から羨道を望む（北西から）

図版十九　天神裏古墳出土遺物



図版二十　長手四号墳



▲ 長手四号墳全景（南西から）

▲ 調査風景（北方から）

▲ 中世墳墓砂利層状況（南方から）

▲ 玄室奥壁（南方から）

▲ 玄室から羨道を望む（北方から）

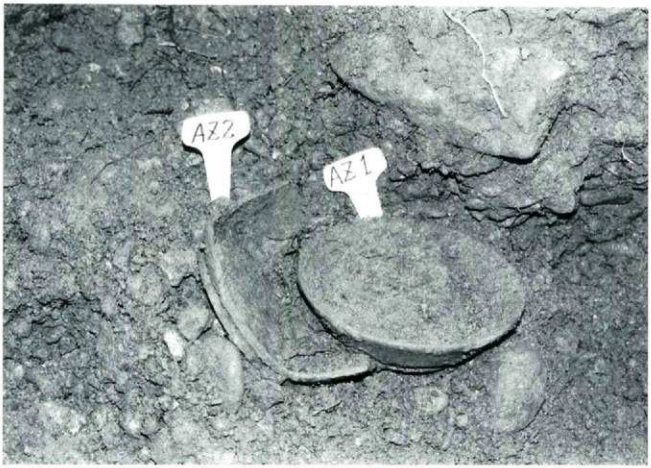
▲ 羨門から羨道及び玄門を望む（南方から）

▲ 南北トレンチ北方箇所周溝セクション状況（東方から）

▲ 東西トレンチ西方箇所版築セクション状況（北方から）

▲ 玄室近景（東方から）

▲ 玄室近景（西方から）



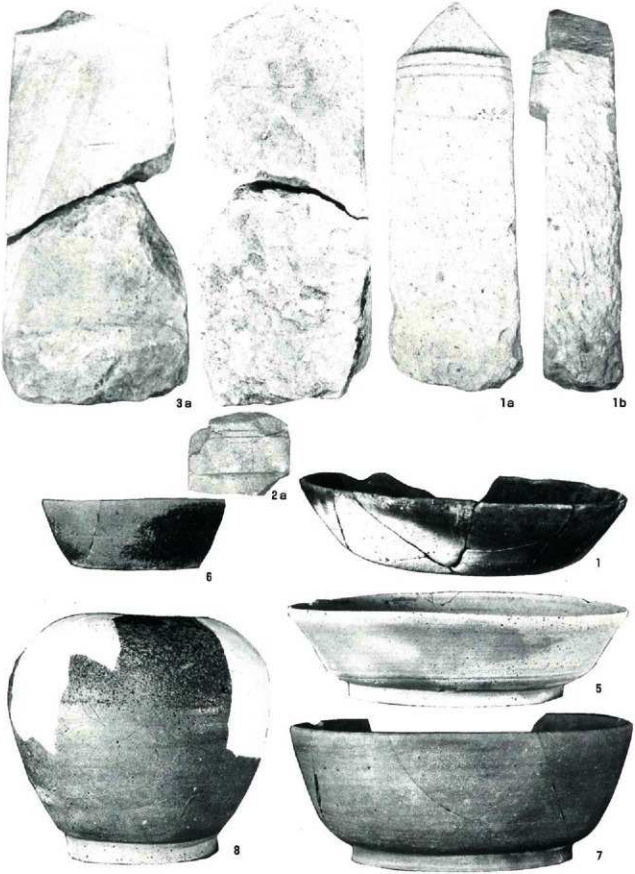
▲ 遺物出土状況（南方から）

▲ 甕子出土状況（東方から）

▲ 欠損した板碑の出土状況（東方から）

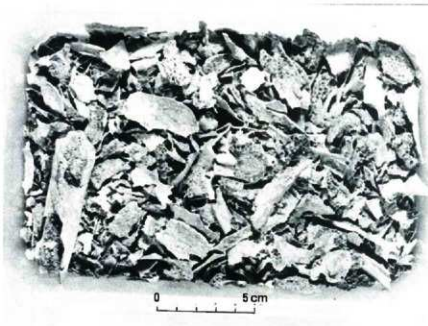
▲ 板碑出土状況

図版二十七　長手四号墳出土遺物



図版二十八　長手四号墳出土遺物

1



上の古瀬戸瓶子内部の火葬骨

米沢市埋蔵文化財調査報告書　第65集
遺跡詳細分布調査報告書
第 12 集

平成11年３月29日印刷
平成11年３月31日発行

発　行　米沢市教育委員会
米沢市金池三丁目１－55
TEL（0238）22－5111
（内線 7504）

印　刷　株式会社 羽 陽 印 刷
米沢市中央三丁目９－22
TEL（0238）23－0467
FAX（0238）23－0480